

Olympic

オリンピック教育

Vol.10 2021/04-2022/03

Education



筑波大学オリンピック教育プラットフォーム
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会

目次

はじめに

あらためてオリンピック・パラリンピック教育の意義を考える	溝上智恵子 ...	2
第10巻刊行にあたって	真田 久 ...	2

研究・活動報告

令和3年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」実施報告	真田 久、宮崎 明世、大林 太朗、福田 佳太 ...	3
OSC コロキウム（筑波会議）開催報告	大林 太朗 ...	7
国内ユースフォーラム2021 実施報告	中塚 義実 ...	12

実践報告

附属小学校	森本 隆史 ...	18
附属中学校	秋山 和輝 ...	20
附属高等学校	鮫島 康太 ...	25
附属駒場中・高等学校	登坂 太樹 ...	27
附属坂戸高等学校	藤原 亮治 ...	30
附属視覚特別支援学校	山本 夏幹 ...	32
附属聴覚特別支援学校	岡本 三郎 ...	34
附属大塚特別支援学校	嶋原 初穂 ...	37
附属桐が丘特別支援学校	寒河江 核 ...	40
附属久里浜特別支援学校	塚田 直也 ...	42

特別寄稿

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業の成果の検討		
ー 2018年度から2021年度の推進校アンケート調査を通してー	宮崎 明世、真田 久、大林 太朗、福田 佳太 ...	45
Visually impaired photographer puts inclusion into focus - Joao Maia interview	Tanmoy Mookherjee ...	51

はじめに

あらためてオリンピック・パラリンピック教育の意義を考える

筑波大学附属学校教育局教育長・副学長 溝上 智恵子

2021年7月から9月にわたり、東京2020オリンピック・パラリンピックが開催されました。1年遅れの開催となったのみならず、新型コロナウイルス感染症が収束しないままの開催となり、残念ながら私たちの多くはテレビ等での観戦を余儀なくされました。しかし、テレビ越しではあっても、参加アスリートたちの活躍に触れて、改めてオリンピック・パラリンピックの持つ「力」を感じたのではないのでしょうか。

さて、筑波大学では2021年度も附属学校群11校をはじめとして、さまざまな教育組織や研究組織において、オリンピックとパラリンピックに関わる活動が展開されました。その中で附属学校群の活動報告と実践報告をまとめたものが本冊子です。個々の活動内容については、ぜひ本冊子をご覧くださいとて、全体の概要を見ますと、オリンピックとパラリンピックに関する教育活動が、さまざまな形で展開されたことがご理解いただけます。例えば、本学の真田特任教授が聖火ランナーとして実際に着用されたユニフォームやトーチをお借りして、こどもたちが身近にオリンピックを感じることもできました。

変異株の登場により、新型コロナウイルス感染症をめぐる状況は依然として不透明である上に、ウクライナ情勢も加わり、今、世界は混沌とした状況下にあります。こうした中だからこそ、スポーツの意義を再考し、世界中のアスリートが集うオリンピックとパラリンピックの役割をじっくりと問い直すことができるのかもしれませんが。オリンピックとパラリンピック教育に携わる教職員のみならず、児童生徒たちも含めて私たち一人一人がその意義や役割を考えるのに良い機会になれば幸いです。

第10巻刊行にあたって

筑波大学特命教授、CORE事務局長 真田 久

延期された東京2020大会が2021年度、コロナ禍ではありましたが、無事に開催されました。開催そして終了に至るまでの関係者の努力は、並々ならぬものがありました。オリンピック・パラリンピック教育においても、新型コロナの感染が収束しない中、オンラインによるアスリートとの触れ合いやスポーツ指導、大会関係者による交流など、さまざまな工夫がなされ、東京2020大会についての教育の実践が積み重ねられました。スポーツ庁の「オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業」は、2015年度の「調査研究事業」の結果を踏まえて、2016年度以降、オリンピック・パラリンピック教育の内容を構築して展開されました。筑波大学、早稲田大学および日本体育大学がサポート役として、2016年度から2021年度までの6年間で、オリンピック・パラリンピック教育推進校の数は、4000校を超えています。東京都以外でこれだけの数の学校関わったことは、日本全国でオリンピック・パラリンピックの理念が次世代の若者に伝えられたことを示しています。

この事業の先駆的な役割を担い、支えたのが筑波大学附属学校群における実践の積み重ねでした。学校間での連携、ICTを駆使しての実践、各教科での取り組みや大会関係者を招いての交流など、多彩な活動が展開されました。その軌跡は、本誌「オリンピック教育」1巻より10巻の中に積み重ねられています。各巻に記載された実践内容は、日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の水準をそのまま示しています。スポーツ庁の事業は2021年度で終了しましたが、本誌が10巻を刊行したのを機に、オリンピック・パラリンピック教育のさらなる深化と発展を目指したいと思います。

令和3年度スポーツ庁委託事業 「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」について

筑波大学体育系、CORE事務局 真田 久、宮崎 明世、大林 太朗、福田 佳太

筑波大学（CORE）は、2015年度よりスポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（初年度は調査研究事業）」を受託し、東京2020大会を通じた日本全国における「オリンピック・パラリンピック教育」の普及・促進を行ってきた。最終年度（大会本番）となる2021年度は3大学（本学、早稲田大学、日本体育大学）、41地域拠点（全67自治体のうち）が参画し、本学では主に14地域拠点（宮城県、福島県、茨城県、群馬県、長野県、愛知県、京都府、和歌山県、島根県、山口県、愛媛県、福岡県、京都市、北九州市）とともに事業を展開した（事業の背景および推進体制等については、本誌 vol.7（第7巻：pp.3-5）を参照されたい）。今年度の主な施策について下記に整理する。

1. 全国中核拠点会議への参加

スポーツ庁および関係団体（内閣官房オリパラ事務局、東京2020組織委員会、東京都教育庁、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター、筑波大学、早稲田大学、日本体育大学）からなる「オリンピック・パラリンピック教育全国中核拠点会議」に出席し、東京2020大会を通じたオリンピック・パラリンピック教育の推進について情報共有を行った。

（日時）

第1回：令和3年10月18日（月）13：30～

（開催方法）

オンライン形式（Zoom）

2. 全国セミナーの開催

各地域拠点における事業の推進にあたり、そのとりまとめを行う各コーディネーター（主に担当指導主事等）等を対象とするセミナーを開催し、事業の趣旨や新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた方針、オリンピック・パラリンピック教育の理論的枠組みと教材の活用方法、実践事例に関する説明を行った。また、各地域拠点との事業推進に係る打ち合わせも実施した。なお、参加者は、各地域拠点より68名および全国中核拠点関係者33名であった。

主 催：筑波大学、早稲田大学、日本体育大学

日 時：令和3年5月14日（金）14：00～17：00

開催方法：オンライン形式（Zoom）

3. 地域セミナー実践支援

本年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、多くの地域拠点で推進校の教員および教育事務所担当者を対象とした研修会をオンライン開催としたり、資料配布に代えて実施したりするケースが多く見られた。本学では、各地域からの要望に応ずるかたちで、別表のスケジュールで情報提供や資料提供を行った。主な内容は以下のものである。

（1）本事業の概要説明

本事業の背景と経緯、オリンピック・パラリンピック教育の意義、全国中核拠点会議で設定された「オリンピック・パラリンピック教育の推進テーマ」について説明した。

（2）他地域における前年度の実践事例の共有

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を考慮した上で、「教科内でオリンピック・パラリンピック要素を含めた実践」や「オンラインでの実践」を中心に、前年度（令和2年度）の実践事例を紹介した。

(3) 各教材の使用方法に関する説明

東京 2020 組織委員会のウェブページに掲載されている、国際オリンピック委員会（IOC）公認教材の「オリンピック価値教育プログラム（OVEP）」、国際パラリンピック委員会（IPC）公認教材の「I'mPOSSIBLE」、東京都教育委員会の「オリンピック・パラリンピック学習読本」、その他授業用資料等を紹介した。また各学校に配布されている、スポーツ庁発行の指導参考資料についても紹介した。

4. オリンピアン・パラリンピアン講師派遣に係る調整・推進校支援

令和 3 年度の担当地域拠点における推進校（14 地域、計 306 校）のオリンピック・パラリンピック教育の実践に際し、特徴的な実践の情報収集や視察をするとともに、コーディネーターと推進校教員の要望に応じた支援（外部講師紹介、継続的な実施に向けた意見交換等）を行った。

とくに、オリンピック・パラリンピアン等のアスリートの推進校派遣調整については、アスリートに協力を仰ぎ、派遣時期だけでなく学校段階や地域、学校の特色に応じた教育実践内容の検討を行った。また、各コーディネーターと意見交換を行い、大学をハブとするより効率的な派遣調整の方法を検討するとともに、派遣されるアスリートから実施されるオリンピック・パラリンピック教育の具体的な内容についても協議した。なお、本年度は 4 地域拠点（宮城県、茨城県、長野県、愛知県）、計 15 校（小学校 7 校、中学校 7 校、高校 1 校）の推進校に以下の 4 名を派遣した。

・千田 健太 氏（オリンピック：フェンシング）

2008 年北京大会出場、2012 年ロンドン大会男子フルーレ団体銀メダル

・平岡 拓晃 氏（オリンピック：柔道）

2008 年北京大会出場、2012 年ロンドン大会男子 60 キロ級銀メダル

・三澤 拓 氏（パラリンピアン：パラアルペンスキー）

2006 年トリノ大会より 5 大会連続出場

・小池 岳太 氏（パラリンピアン：パラアルペンスキー）

2006 年トリノ大会より 5 大会連続出場

5. 地域ワークショップへの参加および実践支援

各推進校でのオリンピック・パラリンピック教育の実践後、教員間において本年度の成果および課題、来年度以降に向けた構想を共有するための報告会が行われた。本学では別表のスケジュールの通り、コーディネーターの依頼に基づき、全国中核拠点会議および全国ワークショップ関連の情報共有、他の地域拠点における特徴的な実践例紹介、講評等を行った。また、東京 2020 大会終了後（事業終了後）のオリンピック・パラリンピック教育の継続性・発展性についてディスカッションに応じ、各地域拠点の実状と特徴にあわせた助言を行った。

6. 全国ワークショップの開催

各地域拠点のコーディネーター等を対象とする「全国ワークショップ」を開催し、本年度の事業の成果を総括し、新しい生活様式に対応したオリンピック・パラリンピック教育の取組について共有した。また、事業終了後に向けて、大会開催年度の実践的なオリンピック・パラリンピック教育や大会終了後のレガシーに関する取組に向けた情報共有および諸課題について意見交換を行った。参加者数は関係者 41 名、各地域拠点から 77 名であった。

7. 筑波大学附属学校群におけるオリンピック・パラリンピック教育の授業研究・開発

筑波大学附属学校群（小学校 1 校、中学校 2 校、高等学校 3 校、特別支援学校 5 校）では、オリンピック・パラリンピックの価値や意義に関する体験的な学びについて多様な実践モデルを構築し、CORE 事務局ではそのアイデアと成果を本事業における地域／全国ワークショップで報告・共有した。

8. 実践事例集（令和2年度分）の発行

令和2年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」において各地域拠点の推進校で実施されたオリンピック・パラリンピック教育の特徴的な実践事例（全国の推進校から45事例、筑波大学附属学校群から2事例）を集約した冊子を発行し、各地域拠点の推進校等における参考資料として提供した。

9. 推進校アンケート（3回）の分析と報告

各地域拠点の推進校におけるオリンピック・パラリンピック教育の成果について評価すべく、推進校での取組に参加した小学4年生以上から高等学校3年生まで児童・生徒を対象にマークシート式のアンケートを実施した。内容は、オリンピック・パラリンピックそのものの意義や価値の理解度を問うものや、他者理解、ボランティアマインドの醸成等の度合いを測る項目からなり、3回（大会前、大会直後、大会約半年後）の調査を通して、第1回172校（18,902名）、第2回165校（18,523名）、第3回160校（17,061名）から回答を得た。結果を統計的に分析し、それぞれ各地域拠点および関係団体（東京2020組織委員会等）にフィードバックした。

10. 事業総括報告書（日・英）の作成

2015年度の調査研究事業、2016年度以降の全国展開事業を含めた7年間の事業を総括する報告書を作成した。事業実施体制、中核拠点会議において設定された5つの教育テーマ、地域拠点における推進校数等の量的データから特徴的な実践例に係る質的情報などを包括的に揭示するとともに、結びに事業終了後のオリンピック・パラリンピック教育の効果的な継続に関する提言を記した。日本語版を地域拠点等に配布し、それに応ずる英語翻訳版を作成し公開した。

関連する主なスケジュールは表1の通りである。COREでは本事業を通して構築された関係団体および各地域拠点とのネットワークを活用し、また附属学校群の実践的経験とともに、オリンピック・パラリンピック教育の継続に努めてまいります。

表1. 2021年度の事業スケジュール

時期	事業実績
4月	・大学内における推進体制の整備 ・各担当地域拠点との連携体制の整備 ・各推進校等におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践支援（～1月） ・筑波大学附属学校群におけるオリンピック・パラリンピック教育のモデル授業研究・開発（～2月） ・各担当地域拠点のコーディネーターへのオンライン会議システム対応端末の貸出（～3月）
5月	・全国セミナーの開催 ・福島県地域セミナーへの参加、実践支援
6月	・福岡県地域セミナーへの参加、実践支援 ・山口県地域セミナーへの参加、実践支援 ・北九州市地域セミナーへの参加、実践支援 ・宮城県地域セミナーへの参加、実践支援 ・群馬県地域セミナーへの参加、実践支援 ・愛知県地域セミナーへの参加、実践支援 ・「実践事例集」（令和2年度分）の発行
7月	（上記事項の継続）
8月	・長野県地域セミナーへの参加、実践支援
9月	（上記事項の継続）
10月	・第1回全国中核拠点会議への参加
11月	（上記事項の継続）
12月	・愛知県地域ワークショップへの参加、実践支援

1 月	・北九州市地域ワークショップへの参加、実践支援 ・群馬県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・福岡県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・福島県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・茨城県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・全国ワークショップの開催 ・島根県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・愛媛県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・総括報告書（日本語版）の作成
2 月	・宮城県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・山口県地域ワークショップへの参加、実践支援 ・長野県地域ワークショップへの参加、実践支援
3 月	・総括報告書（英語版）の作成 ・事業報告書冊子および事業報告用ウェブページの作成 ・委託事業完了報告書の提出

参考：スポーツ庁委託事業報告用特設サイト <https://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/consignment>

第3回オリンピックスタディーセンターコロキウム (OSRCs Colloquium) について

筑波大学体育系、CORE 事務局 大林 太郎

1. 背景と目的

2021 年 9 月 23-24 日、CORE はオリンピックスタディーセンターコロキウム (OSRCs Colloquium) を主催した。本コロキウムは、4 年に 1 度、世界各国・地域にある IOC 認可のオリンピックスタディーセンター：Olympic Studies and Research Centres (OSRCs、世界に 54 拠点※ 2022 年 3 月時点) が一堂に会して学術交流を行うもので、2012 年は 7 月 25-26 日に英国の Loughborough University 大学で (7 月 25-26 日)、2016 年は 8 月 2-3 日にブラジルの Pontifical Catholic University of Rio Grande do Sul で開催された。第 3 回となる今回は、世界における産学官の優秀な若手による議論を推進する「筑波会議」(参照：<https://tsukuba-conference.com/about>) の枠組みにおいて CORE がホストを務め、オンラインの形式で基調講演、研究発表、若手研究者によるシンポジウム等を行った。ウェブ上のプラットフォーム (参加登録用) の特設サイトは、図 1 の通りである。



図 1. 特設サイトトップページ

2. プログラム

次頁以降に 2 日間のプログラムを掲載する。

The 3rd International Colloquium of **Olympic Studies** and **Research Centres**

Date 23–24 September 2021



The Digital Leaflet Daily Program and Abstracts

In the final discussions of the 2nd International Colloquium of Olympic Studies and Research Centres, which took place on 3rd August 2016 in Porto Alegre, Brazil, all participants agreed on continuing with the tradition of a quadrennial meeting which had started at Loughborough in 2012 already.

Now, on 23rd and 24th September 2021 hosted by University of Tsukuba, Japan, representatives of Olympic Studies and Research Centres hold the opportunity to meet again and to start dialogues on joint research and teaching initiatives.

Host Organization:

Centre for Olympic Research and Education (CORE)
University of Tsukuba, Japan



Steering Group:

Stephan Wassong (Olympic Studies Centre – German Sport University Cologne) - Chairman

Nuria Puig (Olympic Studies Centre – International Olympic Committee)

Nelson Todt (Olympic Studies Research Group – Pontificia Universidade Católica do Rio Grande do Sul)

Hisashi Sanada (Centre for Olympic Research and Education – University of Tsukuba) – Host Organization

Day-1: 23 September 2021

*Time zone: CEST (UTC+2)

Facilitator: Akiyo Miyazaki (University of Tsukuba)

Zoom: 11:45 Open

<https://us02web.zoom.us/j/87391671690?pwd=dmT2RFAYSit4OTZkWnh2dFk4d1dIZz09>

meeting ID: 873 9167 1690

Pass: 761098

12:00-12:30 Opening Addresses

Benton Caroline F. (University of Tsukuba)

Stephan Wassong (German Sport University Cologne)

Maria Bogner (IOC Olympic Studies Centre)

12:30-13:00 The Updates from the IOC Olympic Study Centre

Maria Bogner/Nuria Puig (IOC Olympic Studies Centre)

13:00-13:15 Break

13:15-14:15 Presentations of the OSCs' Collaborations -Part 1-

*15min. presentation+ 5min. discussion

1) Collaborative initiatives in teaching and research of the Olympic Studies Centre of the German Sport University Cologne

Stephan Wassong (German Sport University Cologne)

Thierry Zintz (Director of the Olympic Chair at the Université catholique de Louvain)

2) eMuseum of Sport – Olympic Games in discussion

Nelson Todt (Pontifical Catholic University of the Rio Grande do Sul)

Bianca Gama Pena (Rio de Janeiro State University)

3) SDP Networks and Olympic Movement Connectivity

Cora Burnett (University of Johannesburg)

Holly Collison-Randall (Loughborough University London)

14:15-14:30 Break

14:30-16:00 Session “Olympic Movement in new-normal era beyond the COVID-19”

● Rio 2016 Olympics & Research & Perspectives

Luis Henrique Rolim Silva (Pontifical Catholic University of Rio Grande do Sul)

● Chronometric innovations in the Olympic movement and competitive sports: from regulated time to digital age.

Guillaume Rayot (University of Franche-Comté – CEROU)

● Historical dimension of Tokyo 2020: Faster, Higher, Stronger and Together

Taro Obayashi (University of Tsukuba)



Day-2: 24 September 2021

*Time zone: CEST (UTC+2)

Facilitator: Taro Obayashi (University of Tsukuba)

Zoom: 11:45 Open

<https://us02web.zoom.us/j/87670597785?pwd=aFhuNTlmT3pNYml1Um1USlo2L2lUUT09>

meeting ID: 876 7059 7785

Pass: 135635

12:00-12:50 Keynote lectures (regarding the legacy of the Tokyo 2020)

- The Host Town Initiative for Tokyo 2020 and beyond
Mie Katsuno (Headquarters for the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games, Cabinet Secretariat)
- The Olympic and Paralympic Education in Tokyo
Shinya Nakamura (Tokyo Metropolitan Board of Education)

12:50-13:30 Presentations of the OSCs' Collaborations -Part 2-

*15min. presentation+ 5min. discussion

- 4) Collaboration projects in developing Olympic movement for Tokyo 2020

Akiyo Miyazaki (University of Tsukuba)

- 5) Tokyo 2020 media rituals, social interactions and the development of new research networks

Andressa Fontes Guimarães-Mataruna (University of Beira do Interior)

Adriano Lopes de Souza (Federal University of Tocantins)

Renan Petersen-Wagner (Leeds Beckett University)

Doiara Silva dos Santos (Federal University of Viçosa)

Leonardo José Mataruna-Dos-Santos (Canadian University of Dubai)

Otávio Guimarães Tavares da Silva (Federal University of Espírito Santo)

13:30-13:45 Break

13:45-14:25 Presentations of the OSCs' Collaborations -Part 3-

*15min. presentation+ 5min. discussion

- 6) From Torino 2006 to Milano-Cortina 2026: From territorial competition to research cooperation towards a joint Olympic and mega events research center

Egidio Dansero (Università di Torino)

Stefano Di Vita (Politecnico di Milano)

Francesco Gastaldi (Università IUAV di Venezia)

- 7) Joining the IOC OSC-OSRC Network: a Newcomer From Shanghai

Peijie Chen and Fan Hong (Shanghai University of Sport)

14:25-14:45 Closing (Chair: Nelson Todt)



3. 当日の様子と今後の展望

2日間の開催日程を通して、23 か国から 75 名が参加した。初日は筑波大学のペントン・キャロライン副学長らのオープニングスピーチ、IOC Olympic Studies Centre からの話題提供、各国の OSRCs からの研究発表に加えて、”Olympic Movement in new-normal era beyond the COVID-19” を主題とするシンポジウム企画を行った。ブラジル、日本、フランスからの若手研究者が登壇し、各国における状況が紹介されて、大会開催国（都市）同士の学術的交流の重要性が確認された。

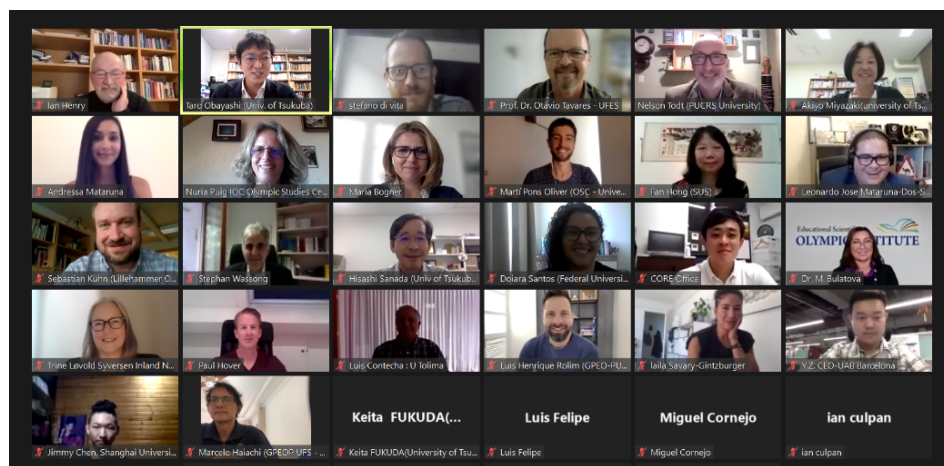


写真 1. 当日の様子（オンライン開催）

二日目はキーノートレクチャーに東京 2020 大会関係者として内閣官房オリパラ事務局の勝野氏、東京都教育庁の中村氏が登壇された。それぞれ大会に際したオリンピック・パラリンピック教育に関する事業の成果を取り上げた。その後は再び各国・地域の OSRCs の発表が続き、CORE も宮崎准教授を中心にこれまでのスポーツ庁委託事業や附属学校における同教育の普及と展開について報告を行った。後半には今後の冬季オリンピック・パラリンピックの開催国となる中国とイタリアのグループからの話題提供があり、次回大会（第 4 回：仏国フランシュ＝コンテ大学）における再会を誓い、クロージングとなった。

CORE では、本コロナウィルスの開催経験とそこで構築された各国・地域の OSRCs とのネットワークを活かし、次回の 2024 年パリ大会とそれ以降に向けた国際的なムーブメントの発展に寄与する所存である。

高校生対象のオリンピック教育プログラム： ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラムについて

筑波大学附属高等学校 中塚 義実

国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム（国際 YF）とは、世界中にあるクーベルタンスクール（図 1 参照）の高校生が 2 年に一度集まり、座学やスポーツ、アート活動を通してオリンピズムを学び、交流を深めあう行事である。開催地は各国持ち回りで、毎回 100 名余りの高校生が世界中から集まる。日本からは 2009 年より生徒を派遣、2011 年からは筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）が中心となってこの行事に取り組み、2015 年からは派遣生徒の選考を兼ねた「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム」が、国内の高校生向けのフォーラムとして開かれるようになった。2017 年からは中京大学でも「JOA ユースセッション」の形で行われ、国内 2 か所のユースフォーラムから 7 名の生徒が選考され、派遣されるようになった。

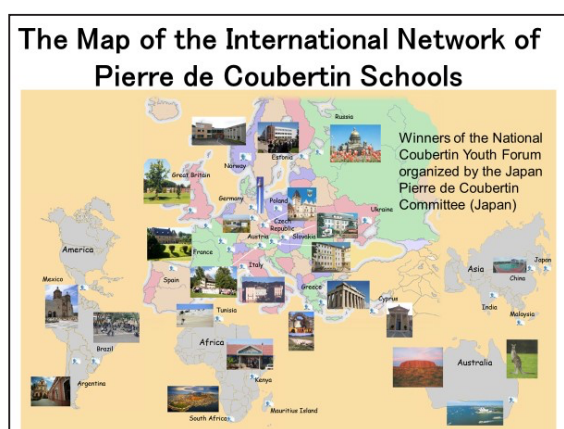


図 1. 世界のクーベルタンスクール

国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム

- 第1回 1997年 ル・アーブル(フランス)
- 第2回 1999年 マッチ・ウェンロック(イギリス)
- 第3回 2001年 ローザンヌ(スイス)
- 第4回 2003年 アレンツァーノ(イタリア)
- 第5回 2005年 ラートシュタット(オーストリア)
- 第6回 2007年 ターボル(チェコ共和国)... 日本に紹介
- 第7回 2009年 オリンピア、パリニ(ギリシア).. 日本初参加
- 第8回 2011年 北京(中国)... 筑附高から2名
- 第9回 2013年 リレハンメル(ノルウェー)... 筑附高から2名
- 第10回 2015年 ピエスチャニ(スロバキア).. 日本から7名
- 第11回 2017年 ウルヌルメ(エストニア).. 日本から7名
- 第12回 2019年 マコン(フランス).. 日本から6名
- 第13回 2021年 キプロス → 延期:2022年10月8～15日

図 2. 過去の国際 YF 開催地一覧

第 13 回大会は当初、2021 年夏にキプロスで開催される予定で、派遣生徒の選考を兼ねた国内 YF は 2020 年 12 月末に、筑波大学と中京大学で開催する予定だった。しかし新型コロナ感染拡大の影響で対面での宿泊行事ができる状況ではなく、オンラインでの開催となった。キプロス大会そのものも 2022 年 10 月への延期が決まり、選考された 7 名の生徒は派遣の機会を失った。しかしせっかくのオリンピック開催年である。互いの近況報告と交流を兼ねて、6 月 8 日に勉強会・交流会がオンラインで開かれた。主催は日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）である。2021 年 12 月には、延期されたキプロス大会への派遣生徒の選考を兼ねた国内 YF が、初めて CJPC の主催で開かれた。オンライン開催は 2020 年 12 月に続いて 2 度目である。関連資料を以下に添付する。

2021 年 国際ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム

参加候補者 勉強会・交流会

日 時：2021 年 6 月 8 日（火） 18：30 ～ 20：00 オンライン

主 催：日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）

共 催：NPO 法人サロン 2002 ほか

参加者：2020 年 12 月に行われた国内 YF で選考された高校生 7 名

高校教師、CJPC スタッフ、オブザーバー数名

コーディネーター：中塚義実（筑波大学附属高校保健体育科教諭／NPO サロン 2002 理事長）

1. オープニング（18：30 ～ 18：35）

2. 参加者近況報告（18：35 ～ 19：00）

12 月の国内 YF 以降、2 度の緊急事態宣言あり。いまま宣言が延長される中、学校生活、自分の身の回りはどうなっているのか。授業は？行事は？部活動は？

本日の MTG への期待は？ 各自 3 分で報告してもらう。

3. レクチャー（19：00 ～ 19：15）

「近代五輪のあゆみー直面してきた諸課題を中心に」 中塚義実

4. tokyo2020 開催をめぐる情報・意見交換（19：15 ～ 19：50）

- ・オリパラ開催をめぐる報道から何を感じ、考えたか。自分自身はどう思うか。
- ・自分たちの日々の生活とどのように関連付けるか（例：学校行事をどのようにしていくか）
- ・今後どう生かしていくか etc.

5. クロージング（～ 20：00）

< 概要（コーディネーターより） >

キプロス大会が延期となり、派遣の機会を失った高校生 7 人にとって、オリンピック前に設けられた勉強会・交流会は、再会を楽しむ場であるとともに、TOKYO2020 の意義を考えるよい機会となった。

まずはコロナ禍で学校行事や部活動の大会が中止や延期となっている近況を報告しあい、そのうえで今夏の TOKYO2020 開催についての思いを語り合った。自分たちの日常と照らし合わせての高校生の視点は貴重なもので、新たな発見も多くあった。

年末の国内 YF 以降、オリンピズムを広げていくことに目覚めた者がいる。校内でオリンピック・パラリンピックを盛り上げる活動を始めたとのこと。「開催するかどうかについて私たちに決定権はないが、オリンピズムを広げていくことなら私たちにもできる」の発言には脱帽した。高校生の方が政治家やマスコミより、よっぽど素直にものごとをみていると感じた。

高校生からは「このような機会をまた設けてほしい」の要望もあったが、その機会を設けることができないまま、年末の国内 YF の季節となった。2022 年 10 月開催予定の第 13 回国際 YF（キプロス大会）の派遣生徒の選考を兼ねた国内 YF である（次頁以降を参照）。

日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム 2021

【目 的】

- 1) オリンピック教育：日本の高校生にオリンピック・ムーブメントやオリンピズムを理解させる
- 2) 選考：第13回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（2022年、キプロス）への参加者を選考する^{注1)}

【主 催】 日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）^{注2)}

【主 管】 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）^{注3)}、中京大学^{注4)}

特定非営利活動法人サロン 2002（NPO サロン）^{注5)}

【協 力】 特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー（JOA）^{注6)}

東京都高等学校体育連盟研究部^{注7)}

東海学園大学

【期 日】 2021年12月25日（土）、26日（日） ※両日とも9：00～17：00

【会 場】 オンライン（Zoom を利用）

【参加者】 高校生 26 名（男 4 名、女 22 名）

筑波大学附属高校（3 名）、筑波大学附属坂戸高校（2 名）、自由学園男子部・女子部（4 名）、国士舘高校（2 名）、
中京大学附属中京高校（13 名）、名古屋大学教育学部附属高校（2 名）

【プログラムとスケジュール】

◆ 12月25日（土）

- 9：00～10：00 オープニング／オリエンテーション（含学校紹介）【中塚義実・田原淳子】
- 10：10～11：00 講義① クーベルタンの思想と行動からオリンピズムを考えよう【和田浩一】
- 11：10～12：00 講義② 嘉納治五郎に学ぶ多様性と調和【真田久】
- 13：00～14：50 講義③ 国際スポーツ大会におけるおもてなしの心【江上いずみ】
- 15：00～17：00 演習① 中京大学スポーツミュージアム【伊東佳那子、来田享子】

◆ 12月26日（日）

- 9：00～10：20 演習② オリンピックと持続可能な社会【宮崎明世】
- 10：30～11：00 特別講演 オーストラリアからみた東京2020大会【Helen Brownlee】
- 11：10～12：30 演習③ 英語での討議【嶋崎雅規】
- 13：30～15：00 演習④ まとめと発表
- 15：20～15：50 オンラインエクササイズ【山田恵子】
- 16：00～16：45 クロージング
- 17：00 解散

◆ 12月27日（月）

課題レポート提出^{注10)}

【参加費】 無料

【申し込み・問い合わせ窓口】事務局：日本ピエール・ド・クーベルタン委員会

＜注一覧＞

- 注 1) 2年に一度、各国持ち回りで近代オリンピックの創始者の名を冠した「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」が開催されている。主催は CIPC（国際 ピエール・ド・クーベルタン委員会）。世界中から 100 名以上の高校生が集い、座学や討議、スポーツ交流やアート活動を通してオリビズムを学ぶ場である。日本からは 2009 年に生徒 2 名がオブザーバーとして参加。2015 年からは 7 名のフルメンバーの参加となり、選考を兼ねた「国内 YF」が CORE や中京大学、NPO サロンや JOA（日本オリンピック・アカデミー）主催で開かれてきた。2021 年にキプロスで予定されていた国際 YF は 1 年延期となり、2022 年 10 月に開催見込み。日本からの派遣生徒は本 YF で選考される。
- 注 2) CIPC の日本支部として 2019 年 8 月に発足。今年度より国内 YF の主催となり、本事業の名称も「日本ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」となった。
- 注 3) 嘉納治五郎生誕 150 年の 2010 年に発足した筑波大学の学内組織で、日本初の OSC（Olympic Study Center）として IOC（国際オリンピック委員会）から認定を受ける。11 校ある附属学校を活かしながら「オリパラ教育」事業に先駆的に取り組み、スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業」をリードする。
- 注 4) 中京大学では毎年「JOA ユースセッション」の名称で、中高生向けの国内 YF が開催されてきた。2020 年度に続き今年度もオンライン開催となったため、中京大学と筑波大学で連携して取り組むこととなった。
- 注 5) スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”に掲げる NPO 法人。その前身は 1980 年代のサッカー関係者の研究会にあり、1997 年からサロン 2002 の名称で活動。月例会は今年 10 月で通算 300 回となる。2014 年に NPO 法人化。「オリパラ教育」事業や U-18 フットサル事業などに関わる。
- 注 6) ギリシャに本部を持つ国際オリンピック・アカデミー（IOA）を頂点とする世界の 148（2019 年現在）の国や地域にある国内アカデミーの一つ。1978 年に設立し 2005 年に NPO 法人化。現在の JOA の中長期目標は「オリビズムの普及と浸透」で多くの事業に取り組む。
- 注 7) 東京都高体連加盟専門部の一つ。都内の高校運動部についての研究を推進するとともに、毎年「東京都高体連研究大会」を主催、部活動のあり方を意見交換する場となっている。2019 年 12 月に都内で開催された「クーベルタン・嘉納ユースフォーラム 2019」を主催、「オリパラ教育」への取り組みを開始した。
- 注 8) 講師はヘレン・ブラウンリー（Helen Brownlee）氏（CIPC 理事、オーストラリアオリンピック委員会副会長）。
- 注 9) 特別講演を受けて、「東京 2020 大会を振り返る」グループ討議を英語で行い、グループごとの成果を日本語で発表する予定。
- 注 10) 課題レポートを提出するところまでが本フォーラムの内容。派遣生徒の選考は、各活動への取り組みとともに課題レポートを評価資料とする。

＜概要（コーディネーターより）＞

これまでの国内 YF は、首都圏では筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）、東海地区では中京大学や JOA が主催してきたが、今回初めて日本ピエール・ド・クーベルタン委員会（CJPC）が主催となった。TOKYO2020 以降のオリンピック教育の担い手として、CIPC の日本支部である CJPC が前面に出てくる形となったのである。特定非営利活動法人サロン 2002 は CORE や中京大学とともに主管として関与し、理事長の中塚が全体のコーディネーターを務めた。

今回も対面でなく、オンラインでの開催となった。できることは限られていたが、昨年度の経験を生かし、運営側も参加生徒もよりスムーズに、抵抗感なく参加できたと思われる。グループ活動では画面上にホワイトボードを出して議論を進めるなど、高校生のオンラインスキルの高さが感じられた。

今回は、世界とつながることができたのも大きな成果であった。CIPC（国際ピエール・ド・クーベルタン委員会）副会長でもある田原淳子氏（国土舘大学／CJPC 事務局長）から事前に、世界中の CIPC 関係者にこのフォーラムの案内が為され、興味を持たれた方々がスイス、アメリカ、ドイツなどから参加された。オンライン開催のメリットと言えるだろう。日本の国内 YF なので日本語で進められたが、雰囲気をつかむことはできた。新たな可能性を世界に発信できた。

2 日目にはオーストラリアからヘレン・ブラウンリー氏が登壇し、スライドを用いて約 30 分の講演をされた。逐語訳がついたことで日本の高校生の理解も深まった。講演後の質疑には、海外からの参加者だけでなく日本の高校生数名からも質問があり、世界に開かれた国内 YF としての第一歩を踏み出すことができた。

「英語での討議」のテーマは、「50年後の高校生に TOKYO2020 大会をどう伝えるか」であった。いまの高校生にとって、1964 年の東京五輪はおよそ 50 年前のできごと。50 年後の高校生にとって、TOKYO2020 はどのようなものとして捉えられるのだろう。それはいまの人たちが TOKYO2020 をどう評価し、伝えていくかに関わることである。「あなたたちは今夏の TOKYO2020 を、50 年後の高校生にどのように伝えますか？」との問いかけは、議論のきっかけとしてわかりやすいものであった。



写真 1. オンライン上の集合写真（海外からの参加者を含む）



写真 2. オンラインエクササイズ

この時間は日本語で話すことも書くことも禁止であった。自分の考えを持ち、言語化し、英語で伝えあうことに加え、オンラインでやり取りするハードルもあった。沈黙の時間が流れることもあったようだが、何とか意思疎通を試みていた。討議の内容はグループごとに日本語で発表する。グループ討議の「まとめと発表」では、「あのときはこういうことを言いたかった…」ということが互いに披露され、お互いを理解しあう時間にもなった。

2 日目最後のプログラムは昨年同様、オンラインエクササイズです。2019 年のマコン（フランス）大会引率教諭である山田恵子氏（自由学園女子部）のリードで、デンマーク体操の要素を加味した体操が紹介され、個人やペア、グループでいい汗をかけた。おじさんたちも参加した。

12 月 27 日までにすべての参加者から課題レポートが提出され、はじめて CJPC が主催した年明けに選考会議が開かれ、代表となる高校生が選考された。ドイツ・ミュンヘンで予定されている第 13 回大会が無事に開催されることを願う。



写真3. 第12回国際 YF (2019 年、フランス・マコンにて)

※「游 ASOBI」(NPO サロン 2002) 広報誌第5号からの転載、一部改編

1. 題材名

第5学年 算数科「合同な図形」(発展)

～合同な図形をたくさんかいてオリンピックのエンブレムを完成させよう～

2. 内容

(1) 題材について

第5学年では合同な図形の学習をする。三角形や四角形など、2つの図形が合同であるとき、対応する辺や対応する角の大きさはそれぞれ等しい。子どもたちは、合同な図形を見つけたり、つくったりする活動を通して、図形の形や大きさが一つに決まる要素について理解できるようになっていく。

合同の意味を理解して、合同の観点からこれまで学習してきた図形を見直すことも大切である。例えば、平行四辺形は対角線によって2つの三角形に分けると、2つの三角形は合同になる。また、逆の見方をすると、2つの合同な三角形を組み合わせると平行四辺形ができるし、合同な三角形をかくことで、平行四辺形を作図することもできる。

このような内容と、オリンピックのエンブレムの作図を組み合わせたのが本題材である。

右の写真①のように3種類のパターブロックを規則的に並べていくと写真②のような正十二角形を作ることができる。この正十二角形を作る過程では、いろいろなきまりが表れてくるので、子どもたちとそのきまりを楽しんでいった。

ブロックを部分的に何度か回転させることによって、オリンピックやパラリンピックのエンブレムのもとになる模様をつくることができる(このことについての詳細は、東洋館出版社「算数授業研究 134号」に詳しく載せているのでそちらを参考にさせていただければ幸いです)。

部分的に回転させていくことによって、真ん中にも正十二角形ができるのだが、その正十二角形を切り抜いたのが写真③である。このドーナツ型の図形には、パターブロックがたくさんある。実は、それぞれのパターブロックの辺の中点を結んでいくと、写真④のようにオリンピックのエンブレムを作ることができる。

また、パラリンピックのエンブレムも、写真②を基本の形として、部分的に回転させていくことによって、できた形から作ることができる。この場合も、オリンピックのエンブレム同様、真ん中にできあがった正十二角形を取り除き、残ったパターブロックのそれぞれの辺の中点を結んでいくとパラリンピックエンブレムができあがっていく。

(2) 実際の授業について (成果と課題)

授業は写真②の図形を子どもたちと作っていくことから始まった。子どもたちは、オリンピックのエンブレムを作るということはまったく知らない状態だった。

はじめに、角の大きさが 30° と 150° のひし形を12こ集めてきれいなお花のような形を作った。子どもたちはこれを見て「きれい」と口々に言う。12このパターブロックの外側にさらにブロックをはめこんでいく。次にはまるのは、 60° と 120° のひし形のパターブロック。同じように12こほど、周りにはまっていく。その周りにはまるのは 90° の正方形のパターブロックである。

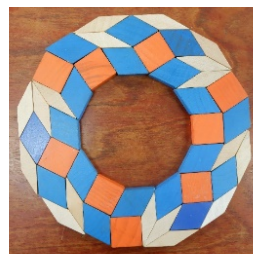
はじめは角の大きさが 30° のものがはまり、次に 60° のものがはまる。そして、 90° のものがはまっていく様子を見ていた子どもたちは、「きまりがある」と言い、手を挙げ始めた。写真②のようにパターブロックを外側にはめていくと、外側にはま



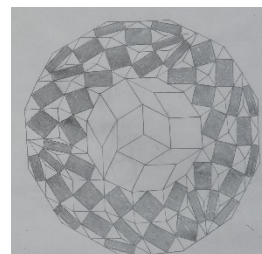
写真②



写真①



写真③



写真④

る角の大きさは、 30° 、 60° 、 90° 、 120° 、 150° というようになっていく。きまりがあり、子どもたちにとってはとても驚くべき気づきとなった。しかし、 150° まできたところで、「次は 180° ？」と首をかしげる子どもがたくさん出てきた。 180° ということは直線になっていくので、子どもたちは不思議に思った。この直線の正体は正十二角形のそれぞれの辺である。

このようにパターンブロックをきれいにはめていくことで、子どもたちは帰納的に考えることができたり、図形の感覚を豊かにすることができたりした。写真②の図形ができあがったところで、教師が、子どもたちに写真③になるように、パターンブロックをどんどん回転させていった。教師が勝手に回転させていったので、子どもたちにとっては文脈がない。これが反省点である。子どもたちにとっては、どうして回転させているのかわかっていなかった。

文脈はないにしろ、オリンピックのエンブレムがどのようにできているのかということについて、子どもたちに説明をしていった。子どもたちはまさかパターンブロックでオリンピックのエンブレムができるとは思っていないので、ビックリしていた。「描いてみたい？」と尋ねてみると「描きたい」とかえてきた。どうやって描けばよいのか悩む子どもたち。

合同な図形の学習をしているので、コンパスを使ってひし形や正方形を作図し、エンブレムを作っていくことができることに気付いていった。算数の時間だけではなかなかかきあげることができないので、総合の時間も使い、子どもたちがオリンピックとパラリンピックのエンブレムを完成させていった。自分たちの作図したものをみて、大満足のようなだった。



写真⑤

3. 今後の予定

この実践は 2020 年と 2021 年に実施したものだが、東京 2020 大会があったということを未来の子どもたちとも実感するために、数年後にも実践していきたい。

オリンピック・パラリンピック教育の多様性と発展性

筑波大学附属中学校 秋山 和輝

1. 背景

新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大に伴い、延期されていた東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、東京 2020 大会）が今年度の夏季に実施された。本校はオリンピック・パラリンピック教育（以下オリパラ教育）を継続的に学校教育に位置付けて指導している。東京 2020 大会は無観客で行われ、実際に生徒は生で観戦できなかったがテレビの前で応援している様子を生徒から聞いた。今年度の本校のオリパラ教育を授業実践、総合学習、特別活動の三つに整理して活動を報告する。

2. 目的

本校のオリパラ教育の活動報告を目的とした。そのための各取り組みを以下のように設定した。

- (1) 保健体育科の授業における実践事例
- (2) 総合学習（2、3 年生）の取り組み
- (3) 特別活動での取り組み

3. 活動報告

(1) 保健体育科の授業における実践事例

本校では計画的にオリパラ教育を教育課程内に設定して継続的に指導を続けてきた。今年度はそれぞれの学年の実践を報告する。

①体育理論における東京 2020 大会のレガシーを考える実践報告（第 3 学年）

東京でオリンピック・パラリンピック競技大会の開催が決定してからオリパラ教育は加速し、今年度東京 2020 大会が開催された。継続的にオリパラ教育を学習してきた生徒にとってどのようなことがレガシー（遺産）として残っているのかを探索的に確認、共有することは大変重要であると考え、体育理論として 3 時間設定した。レガシーという言葉キーワードに学習を進めたがあくまでレガシーは個人にとって異なるものであり、多角的な視点からレガシーを捉えることを目的とした。GIGA スクール構想に伴い生徒の一人一台端末を利用してアンケートの集計では Google form を活用し、その分析には KH coder を用いた。授業展開としては生徒のオリンピック・パラリンピックに関する考えをアンケートで集計し、基礎的な内容（オリンピック・パラリンピックの理念や開催される経緯、競技種目）を学習した後に 1964 年の東京で開催されたオリンピックのレガシーを紹介し、レガシーは多様であること、身の回りにも様々な形でレガシーが残っていることなどを確認した。また自分なりにレガシーを考えるだけでなく、それを仲間と共有することで新たな視点を得るだけでなく、他者に分かりやすく伝えることができるようになった生徒の様子が見られた。生徒にとってのレガシーは多岐にわたるが選手の一生懸命に競技に向かう姿勢から勇気や感動といった無形のレガシーを記述している生徒が多く見られた。一方で、東京 2020 大会の開催にあたっては開催の是非が問題となった。コロナ禍で様々な活動に制限が課されたが、普段通りでないことで様々なことを考えたことこそがレガシーとして捉えている生徒の感想も見られた。

②ボッチャの実践報告（第 1、2 学年）

1、2 年の体育理論でパラリンピック種目を体験する活動を行った。男女差や身長差などを感じず、だれでもだれとでも楽しめる種目としてボッチャを授業で取り扱った。生徒の中には初めて行った生徒がおり、はじめはルールややり方に戸惑う姿が見られたが何回か行う中でジャックボール（白球でターゲットとなる球）に近づけられた時には歓声が上がった。



写真 1. ボッチャの実践の様子

③ブラインドサッカーの実践（第3学年）

第3学年のサッカー単元の中で終盤にブラインドサッカーに触れる機会として2時間を設定した。足を中心としてボールを扱うことを単元全体で習得した後にアイマスクをした状態で移動すること、さらにはアイマスクをした状態でボールを足で扱うことの難しさを経験することを通して障害の理解を学習の中心として授業を展開した。ボールを足で扱うことが可能になってもアイマスクをした状況は慣れていないのでブラインドウォーク（アイマスクをした状況での移動）やラインナップ（アイマスクをした状態で出席番号順に並ぶ）など視覚に障害を抱えている方がどのような世界を体験しているのかを学習させた。ボールの扱いよりもブラインドサッカーで活躍している選手たちがいかに難しいことをしているのか、さらには視覚に障害を抱えている方と接する機会があった時にはどのようなことを配慮しなければいけないかまで発展的に生徒に考えさせることができた活動であった。



写真2. ブラインドウォークの様子



写真3. ブラインドサッカーの様子

(2) 総合学習（2、3年）の取り組み

本校ではスポーツの多様な関わりをテーマに総合学習で探求活動を進めた。スポーツというテーマでは生徒に馴染みがあるものの他者理解や障害理解につなげながらスポーツを通した様々な活動を学習する場である総合学習の取り組みを紹介する。

①パラスポーツ体験（第2学年）

生徒が体験したことがないパラスポーツを体験する機会となった。具体的な種目としてはボッチャ、ゴールボール、シットイングバレーである。生徒は普段行っていないスポーツであり、難しさを感じながらどのようにすれば上手くいくかを工夫しながら取り組むことができた。活動を通して単に体を動かすことを目的にしているのではなく、障害を抱えている人の視点やその競技や競技者への敬意など様々な視点で捉えることを指導した。



写真4. シットイングバレーの様子

②障害者の方へのプレゼンテーションの工夫（第2学年）

本校の卒業生を呼び、「障害者の方にプレゼンテーションしたらどのような工夫ができるか」をテーマに班ごとに工夫する点を話し合い、練習する時間を設けた。最終的には班ごとに発表して全体で共有した。発表者が工夫することで障害が障害でなくなるという視点で文字をユニバーサルデザインのフォントを使用することや文字サイズは36pt以上を使用することや図形や写真だけでなくその説明文を同時に載せるなど何気ない工夫で障害者を抱えている方への伝わり方が異なることを学んだ。発表方法に関しても発表者とは別にジェスチャーする人を設けるなど役割分担をしてみんなに伝わる発表をどの班も心がけて取り組んでいた姿が印象的であった。



写真5. 卒業生の講演



写真6. 班ごとの話し合い場面

③オリンピック開催の是非についてのディベート学習（第3学年）

オリンピックの開催にあたりメディアを中心として様々な意見が飛び交った。生徒はそのような情報を得て、中学生なりの考え方でオリンピックの開催に賛成か、反対かをディベートする機会を設定した。実際にディベートを行ったのが6月ということもあり毎日のようにメディアで開催の是非に関する記事が流れ、生徒においても高い関心を持つテーマとなった。どちらの立場になっても根拠を示せるように授業のはじめに両立場の新聞記事を紹介した。自分の考えはもちろん大切であるがディベートとしての側面を担保するために根拠を示すことや理論的な主張の仕方についても指導した。実際のディベートはとても白熱し、意見はどちらに偏ることなく全員が発言し、立場としての考えを共有する機会となった。

④オリンピック・パラリンピックをテーマとした探求活動（第3学年）

中学校3年生間の探求活動のまとめとして論文を作成する。論文作成にあたり生徒自身の興味や研究課題を進めた。NHK 特設サイトより東京2020大会のアーカイブ動画を見て、東京2020大会を対象に研究を進めた生徒が複数人見受けられた。生徒は東京2020大会の動画を自分のタブレットPCから自由に見ることができ、継続的に分析をすることができた。論文テーマを一部紹介する。



写真7. 探求学習時の動画視聴

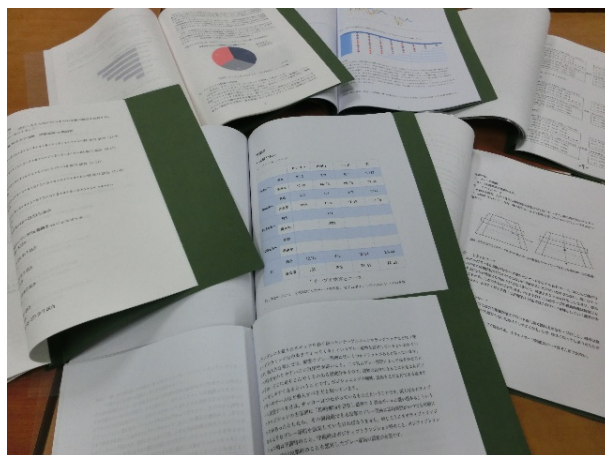


写真8. 生徒が作成した論文

表1. 論文タイトルの一部

論文のタイトル（一部抜粋）
射撃における集中力と最終順位の関係
バレーボールのスパイクをポジションで分析する
伊藤美誠選手から学ぶ卓球シングルス必勝法
バスケットボールにおけるリバウンドとシュートの関係について

(3) 特別活動での取り組み

①運動会の聖火ランナー

筑波大学真田先生のご尽力いただきまして真田先生が実際にご使用になった聖火トーチとそのウェアをお借りできることになった。本校では運動会の開会式の前にセレモニーとして聖火ランナーの入場を設定した。運動会の責任者の生徒を中心に3名の生徒がトーチを持ちながら入場することができ、ランナーの生徒はもちろん全校生徒にとってもオリンピックの聖火を身近に感じる機会となった。



写真9. 運動会の聖火ランナー入場

②木村敬一選手のご講演（第2学年）

東京2020大会で金メダルを獲得したパラ水泳選手である木村敬一選手を招聘し、ご講演いただいた。まん延防止等重点措置がなされている期間であり、当日はオンラインでの講演会となった。第2学年の205名の生徒を対象に金メダルを獲得されるまでの木村選手の想いや考えを聞ける貴重な機会となった。第2学年では単なる講演会ではなく、今までのHRH（ホームルームアワー）の障害理解と関連づけて計画された。講演の内容に関する関心は高く、質疑応答ではその時間内で質問希望者が全員は質問できない程であった。



写真10. スライド資料

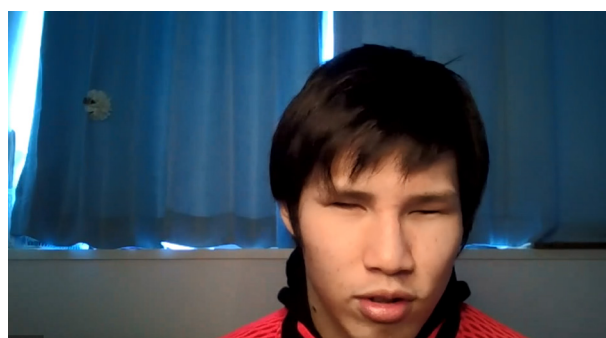


写真11. 木村敬一選手

4. 成果と課題

継続的なオリパラ教育を推進し、一定の成果が生徒の感想からも得られている。今年度はコロナ禍であり、木村敬一選手のご講演を全校生徒で聞くことはできなかったが来年度以降はオリパラ教育に関する講演はたくさんの生徒に聞いてほしいと思う。オリパラ教育を保健体育科の授業で実践できたが、他教科と連携した実践や教科を横断した取り組みに関しては不十分である。単にスポーツ科学の内容としてではなく、国際理解や障害理解などオリパラ教育の様々な面から実践を進めていきたいと考える。

5. 今後の予定

来年度以降に関しても学校全体でオリパラ教育を継続していこうと考える。今年度は、保健体育科の授業内では取り扱いがあったものの、他教科ではオリパラ教育に関する実践はなされなかったので教科を越えた実践を報告していきたいと考える。また、保健体育科の授業中に取り扱われたものの系統的な指導を継続できていないので、カリキュラムの中でどのように位置づけるかを検討する必要があると考える。

6. 総評

オリンピック教育推進委員として3年間携わらせていただいた中での総評であることをご理解いただきたい。附属11校と大学が共同して継続的に進めていくオリパラ教育は全国的にも珍しく、学習成果としても大変重要であったと考える。筑波大学のCOREを中心にオリパラ教育は最先端の情報と確かな根拠から継続的に進められたことが最大の強みである。オリパラ教育は学校全体で取り扱う内容であり、教科の授業成果ならず行事など様々な場面にオリンピックの精神は息づくと感じる。本校では生徒の学びのために継続的に講師を招聘し、ご講演いただき、生徒からも大変好評である。また各教科の授業でも様々な内容と関連づけて学習を進めることが本当の意味でのオリパラ教育の遺産であると考え。今年度の保健体育科の研究協議会では東京2020大会のレガシーを生徒とともに考え、共有したが大変好評であった。一過性のイベント、祭典にしないためにも東京2020大会までオリパラ教育を行うのではなく、東京2020大会後も継続的に行うオリパラ教育でなければならないと思う。

附属高等学校の取り組み

附属高等学校 鮫島 康太

1. 体育理論の授業

保健・体育理論の授業では、オリンピック・パラリンピックを題材にした授業や、それに付随する様々な問題を取り上げて生徒に思考させる授業が行われ、生徒の問題意識を育む貴重な場となっている。今年度は夏季の2020年東京大会、そして冬季の2022年北京大会が行われたことで、生徒も教員も感度の高い授業内容になったと感じている。コロナ禍の副産物としてオンライン授業のノウハウを獲得でき、平常授業になってもそれらの利点を取り込みながら授業を行うことで、よりスムーズな情報提供や多角的な議論を交わすことができるようになった。具体的には、授業前後の情報集約やクラス内の意見の見える化などである。

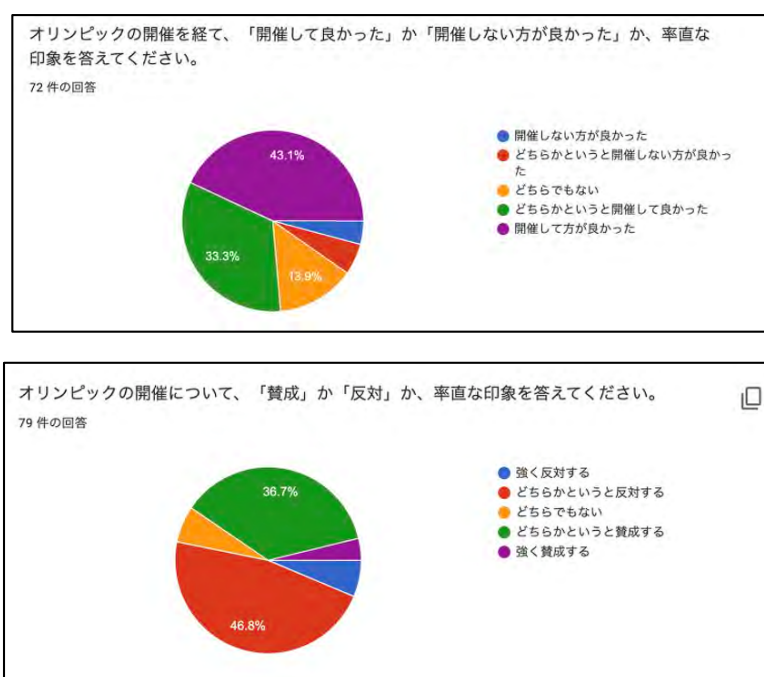


図1. 授業内アンケートの結果

また、今年度は本校教育研究大会において「オリンピックを題材とする体育理論の授業」と題した発表が中塚教諭によって行われた。それらをまとめたものが本校の研究紀要にも掲載される。

2. 筑附スタディとしての取り組み（総合的な探究の時間）

「筑附スタディ」では、一年次では研究調査に関する手法（データ収集、統計など）を学習し予備研究を行う。二年次で課題研究を行う。最終的には論文を作成するというものである。二年次の大まかな流れは、4月にオリエンテーション、5月に研究グループ形成とテーマの焦点化を行い本格的な研究活動に入っていく。オリンピック・パラリンピックに関連することは研究題材として多く挙がってきている。

3. 学校行事として（スポーツ大会）

コロナ禍でその重要性を一層感じるのが学校行事である。スポーツを通して他者とのかかわりから多くのことを感じ学ぶ姿勢を養うことがオリンピズムであると考えれば、本校で行っている「スポーツ大会」もオリンピック教育の代表的な事例の一つである。

スポーツ大会は、昨年に引き続きコロナ禍での開催形態である「学年ごとで実施、種目のみ実施」で行われた。種目は1・2年生がバレーボール、アルティメット、ドッチボール。3年生はバレー、アルティメットに加えてバスケットボール。実行委員は、勝敗にこだわりすぎるのではなく「コロナ禍だがスポーツ大会が実施できることを喜ぼう」「楽しもう」という雰囲気での大会実施を目指した。授業内練習の様子からはスポーツの楽しさやフェアプレー精神、目を見てコミュニケーションをとる喜びを感じる姿が見受けられた。



写真1・2. スポーツ大会の様子と開会式での聖火ランナー（代表生徒）

4. 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの参加、および日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラムへの参加

2年に一度開かれる「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム(国際 YF)」は世界中から集まった高校生同士がスポーツやアート活動、座学や討議などを通してオリンピズムを学ぶ。延期となった2021年キプロス大会にも本校から生徒が派遣される予定である。また、国際 YF への参加者選考を兼ねる「日本ピエール・ド・クーベルタンユースフォーラム」にも複数の生徒が参加した。

5. その他

保健体育科を中心とする日々の授業や学校行事、部活動等、学校における教育活動全般にわたって「オリンピズム」を学ぶ姿勢は、嘉納治五郎校長の頃から本校が取り組み、いまでも受け継がれている。コロナ禍で様々な制限が課される状況であっても、「学びを止めない」という本校教職員の共通理解のもと、試行錯誤をしながら教育活動を行ってきた。東京でのオリンピック・パラリンピックが開催された後も、「かつては」とならないよう、これからも研究・実践し続けていく。

オリンピック精神を他者に伝える取り組み

附属駒場中・高等学校 登坂 太樹

1. 対象と目標（ねらい）

高校2年生の課題研究において『“筑駒”オリンピック・パラリンピックを開催する～オリンピック精神を伝えるために～』と題して講座を開講した。今夏にオリンピック・パラリンピックが開催された。これほどあらゆる意味で注目されるオリンピック・パラリンピックはなかった。そもそもオリンピックとは「スポーツを通して心身を向上させ、文化・国籍などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献すること」というオリンピック精神をもって行われる祭典のことである。本課題研究ではどのようにしたら「友情、連帯感、フェアプレー」の精神をみんなに広めることができるのかをテーマにして研究していった。

方法としてはまずオリンピック精神や身体文化とは何かということを外部の講師を招いたり、日本オリンピックミュージアムを訪れたり、東京2020大会の競技会場（競技会場等施設見学モデルコース）を訪れるなどして理解を深めていった。そのあと、個人やグループでオリンピック精神を伝えるためのプログラム作りをしていった。このプログラムとは身体を使った簡単なゲーム・アプリゲーム・ボードゲームなどのことを指す。作成後に、主に中学生を対象に“筑駒”オリンピック・パラリンピックと題して発表会を開いていく。最終的に各プログラムにつき1枚のポスターを作成してポスター発表をした。

2. 内容

内容は以下のとおりだった。課題研究という性質上、最後には自分の取り組みについてポスターにまとめ発表するという機会を設けた。

- ・ 5月8日（土） 全体オリエンテーション
- ・ 5月29日（土） 講義、本研究の進め方、各自のテーマ設定
- ・ 6月12日（土） 各自のテーマ設定
- ・ 6月26日（土） オリピックミュージアムへ見学
- ・ 7月8日（木） 筑波大学 体育系 助教 大林太朗先生による講演
- ・ 9月11日（土）／10月16日（土） プログラムの作成
- ・ 11月13日（土） 本課題研究内で発表
- ・ 12月13日（月） “筑駒”オリンピック・パラリンピックの開催①（全校対象）
- ・ 1月29日（土） “筑駒”オリンピック・パラリンピックの開催①（中学3年生対象）
- ・ 3月14日（月） ポスター発表会

3. 成果と課題

成果として、各イベントでの課題研究受講生とプログラムを受けた生徒の感想を載せていく。

(1) 6月26日（土）オリンピックミュージアムを訪問見学では

- ・ 荒木飛呂彦先生のイラストがあって良かった。オリンピズムを学べたと思う。また、改めて世界のトップ選手は異次元だなと実感できた。
- ・ 難しい展示ばかりでありあまり楽しめないだろうなと思っていましたが、体験型の展示や分かりやすい映像を使った展示が多く思いのほか楽しめました。チケットは取れませんでした。是非とも家で中継を見たいと思えた一日でした。
- ・ 過去のオリンピックの聖火トーチなどの貴重な展示物がたくさんあって興味深かった。また選手一人ひとりに注目したパネル展示などではオリンピック選手の内面やその苦悩などを知ることができて夏のオリンピックがますます楽しみになった。

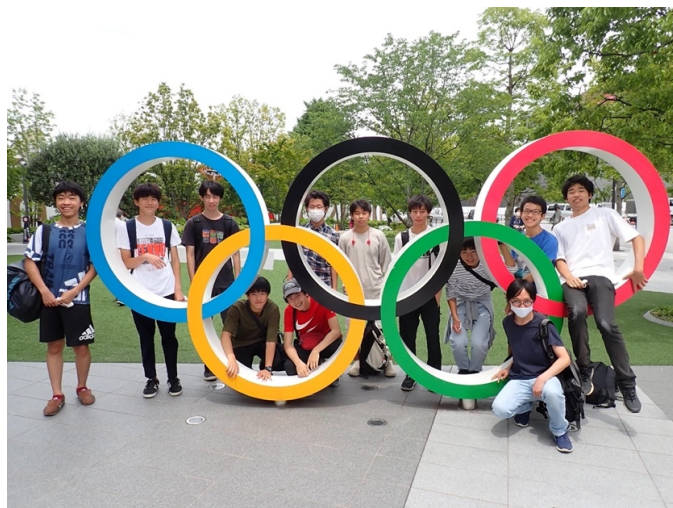


写真1. オリンピックミュージアムにて調べ学習

(2) 7月8日（木）筑波大学 体育系 助教 大林太朗先生による講演では

- ・ 過去のオリンピックでの疫病との関係など面白い話がたくさん聞けて参考になった。
- ・ オリンピックの開会式をデザインするという新しい視点からオリンピックというものを俯瞰する事ができ、オリンピックについてより一層理解を深められたと思う。
- ・ いだてんを見ていたので、時代考証に携わっていた方に講演していただいたのは興味深い体験となった。コンセプトを考えるのは面白かった。



写真2. 筑波大学大林先生による講演・ワークショップでの様子

(3) 12月13日（月）“筑駒”オリンピック・パラリンピックの開催①（全校対象）

①課題研究選択者の感想

- ・ 中一がみんな元気でとても楽しかったが競技の意図を理解してもらうのが難しかった。
- ・ 中学生とあそべて楽しかった。また、オリンピック精神も学べて良かったと思う。
- ・ 最初はルール説明等に手間取ったが、だんだん慣れてきた。中学生が楽しんできたようでよかった。

②受けた側の感想

- ・ パラリンピック競技に流行の物を掛けた、とても興味深い遊びであったと思います。ポッチャ自体が楽しいのですが、それに対してプレーで信頼を取るというものを加えることで、チームスポーツの風を出していて良かったです。（中1）
- ・ 音や味方からの指示が思っていたよりもいいヒントになったと感じた。

- ・ 視覚というのは自分の生活の上でなくてはならないものであると感じた。
- ・ 目が使えなくなると想像以上に方向感覚が無くなるし、思うように歩けなくなることを実感した。また、そのような状況になったときの音の与える情報の多さに不思議な感覚を覚えた。チームの人と一体となってゴールを決められて楽しかった。
- ・ 力が少しでも強かったら遠くに行ってしまうけれど、弱すぎても変な方向に行ってしまう、ハラハラして楽しかったです。



写真3. 課題研究生徒作成のプログラムを実施した時の様子

(4) 1月29日（土）“筑駒”オリンピック・パラリンピックの開催①（中学3年生対象）

①受けた側の感想

- ・ 僕が遊んだほかのものとは違い完全新作のようなもので、とても遊んでいて楽しかったミスをするとかの場所にいてもはじめて戻ってしまうという都合上、小や中にいる人は攻めきなプレーをし、王や大の人は守り寄りのプレーをするというのが面白かった、そこで小や中のひとが点数を決めても大の人が王になるというジレンマもあり時間を見ながらプレイスタイルを考えるのがとても楽しかった。また遊んでみたい。
- ・ ボールを投げるわけではないボール鬼ごっここと追うことでとても斬新で楽しかった。
- ・ パスの精度やキャッチをうまくしつつ逃げていく人を囲っていくなど戦略性もありよかった。
- ・ ポッチャは遊んだことがあったが足でやるというのは新鮮だった。当日は普通のサッカーボールを使ったのだが少し転がりすぎてしまったり体育館の傾斜によってそれなりに難しかった。ハンドボールのようなボールを使えばいい難易度になるのではないかと思った。

(5) 課題研究者作成のポスター（一部）

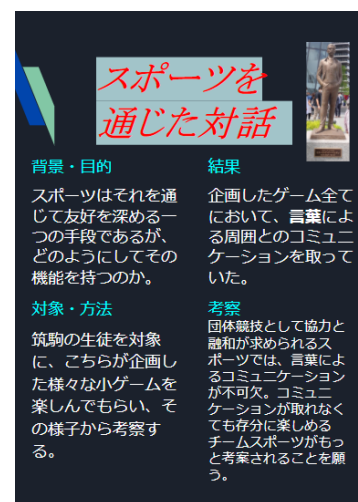


図1. ポスター

4. 今後の予定

次年度も引き続き、高校体育理論での競技種目の紹介などや、オリンピックによる講演会、オリンピック施設の訪問などを行っていく。

5. その他

今回の課題研究や高校の体育理論の中の種目紹介などで、「オリンピック」そのものへの興味関心が高められたと思う。オリンピックの教育価値の浸透についてはまだまだ改善の余地があるが、何かプログラムを行った後に気づかせるよりは、プログラム実施前にすでのこのプログラムを行うとどのような価値が身に付くのかを説明すると、その価値に向かって行動を起こせるということに気が付いた。

筑波大学附属坂戸高等学校実践報告

附属坂戸高等学校 藤原 亮治

1. 対象と目標（ねらい）

全生徒がスポーツの持つ豊かさを多面的に探究するなかで、生涯にわたりスポーツや身体活動を、自己および自己を取り巻く社会の中で、主体的かつ効果的に活用できるようになるためのスキルを身につける。

2. 内容

(1) 附属特別支援学校とのスポーツ交流学习

特別支援学校とのスポーツ交流学习を2校で実施した。事前交流ができない中、各校の先生から生徒の様子を聞いたり、創作過程のスポーツに対するアドバイスを相手の生徒からもったり、オンラインでの情報交換を工夫した。大塚特別支援学校との交流の反省と、事前に共有したいくつかのコンテンツへの桐が丘からのフィードバックをもとに、実施種目を絞り、改善したものを交流会で実施した。その後、改善点などを共有した。

これらの活動を含め、科目の学習成果をより外化するため、デジタルメディアツールを用いた「スポーツ」をテーマとして創作活動を行った。作品発表に際し、WOWOWの映像コンテンツ「WHO I AM」のチーフプロデューサー太田慎也氏を招へいし講演会と発表会を開催。長年にわたってパラリンピック選手を取材してきた中で生じた自己変容経験と照らし合わせながら的確なコメントをいただいた。

- ①大塚特別支援学校とのユニバーサルオンラインスポーツ・レク交流会
- ②桐が丘特別支援学校とのユニバーサルオンラインスポーツ交流会を実施
- ③パラリンピック教育教材「WHOIAM」制作チーフプロデューサー太田慎也氏の講演会
「media からみたスポーツと人のすがた」



写真1・2. 大塚特別支援学校との交流の様子



写真3・4. 桐が丘特別支援学校との交流の様子

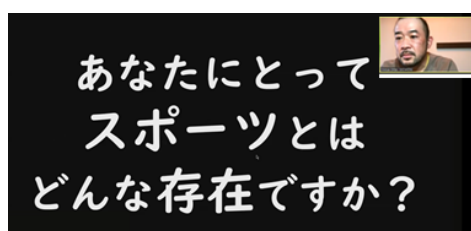


写真5. 太田氏の講演会

(2) 保健の授業における WHOIAM の教材化

1 年次の単元「自己実現と健康」において、映像を抜粋し教材化。ロールモデルとして紹介するとともに、行動選択における環境要因との個別最適なかかわりについても考えをまとめた。

(3) クーベルタン - 嘉納ユースフォーラム 2020 参加

本年も 2 名の生徒がオンライン参加した。他校の生徒との対話によって、自己の課題への気付きや知識拡張の機会になったようである。

(4) 3 年体育「アダプテッド・スポーツ」の実施

2015 年からアダプテッド・スポーツやニュースポーツをオムニバス形式で 8 時間（本年度実施種目はゴールボール・ボッチャ・キンボール・ブラインドバースボール）と体育理論として 2 時間を扱い「日本のスポーツと進行」「スポーツと環境」「ライフスタイルとスポーツ」の項目にパラリンピックを教材に学習を実施している。パラリンピック開始前の 7 月と開始後の 10 月に実施した。

(5) オリンピック・パラリンピックに関する探究活動支援

車いすバスケットボールの認知拡大・普及に関する課題を総合的探究で実施している生徒が、以下の取り組みを行った。

①車いすバスケットボール校内体験会の実施

「埼玉ライオンズ」と協働した生徒の活動を支援し、校内体験会を実施した。この後のイベント企画協力者を集う予備イベントとして意味のある体験会となった。



写真 6. 体験会の様子



写真 7・8. 練習試合の様子



②車いすバスケットボールの練習試合支援を生徒が本校で運営

当日はコロナ感染防止に最大限配慮しながら、上記目標の達成を地域に拡充していくことを目的に、地元のダンスチームと共同でハーフタイムショーを企画した。コロナ禍で発表の機会をない現状との相互の課題解消に貢献した探究活動であった。

3. 成果と課題

本校の保健体育カリキュラムに上記学習内容を適切に一図けることで「スポーツの多面的価値をもちいて社会参画できる資質の発芽」を促しているが、自己のライフスタイルとスポーツの親和性が高い生徒は、スポーツのツールとしての価値を認識し、WELLBEING の実現に向けて試行錯誤する姿勢を見せるとともに、ステークホルダーとなりえる人と協同性を発揮して協働する姿を見ることができた。また、スポーツに関わる多様な人との交流を通じてオリビズムおよび国際イベントとしてのオリンピックを題材にすることで、物事を多角的（具体⇄抽象 背景把握）に捉える資質能力を磨くことができた。

コロナの感染拡大により持続的な授業のありかたにむけた地元学校や学童との協働計画は今年度実施ができなかった。講師を招へい費用の課題と合わせ、引き続き持続可能な授業の在り方、学校外を巻き込んだオリンピック教育の普及に向け努力していく。

4. 今後の予定

地域の学校や、企業・大学との持続可能な連携の在り方を模索する。

5. その他

本大会が終了するなか、この教育の真価が問われるのはこれからの教育にどのように適合しながら、普遍的な価値あるものとしていくのか。本校ではこのことを非常に重要視しながら授業開発を進めてきた。コロナ禍で難しい学習環境であったが、今後も国際平和に資する資質能力の育成に寄与できるオリンピック教育の在り方を模索していきたい。

東京 2020 パラリンピック大会を核とした 本校におけるオリンピック・パラリンピック教育の取り組み

附属視覚特別支援学校 山本 夏幹

1. 対象と目標（ねらい）

(1) 対象

本校小学部 5、6 年生 12 名

本校中学部生徒 32 名

本校高等部普通科・音楽科生徒 50 名

合計 94 名

(2) 目標

東京 2020 パラリンピック競技大会（以下、東京パラリンピック）に出場したアスリートを招いて、大会報告会を開催する。報告会では以下の効果を期待したい。

- ① 障害者スポーツの国際大会では最大級の規模かつ自国開催となった東京パラリンピックを終えて感じたことや経験を聞き、世界で活躍できる人材の育成に繋げる。
- ② パラスポーツに対する興味関心を深め、次世代のアスリート育成に繋げる。
- ③ 本校在学・卒業のアスリートの活躍を通して、目標達成に向けた過程について学び、自身のロールモデルとすることで日ごろの学校生活にその学びを活かす。
- ④ オリンピック・パラリンピック教育を柱としながら、卒業した OBOG に対して本校教育活動に協力してもらい、継続的な双方向の協力関係の構築を目指す。

2. 内容

東京パラリンピックの熱が冷めやらぬ 2021 年 12 月に、大会に出場したアスリートを招き、在校生へ向けたメッセージを届けていただく場として報告会を実施した。第一回となった 12 月 6 日は、高等部普通科・音楽科生徒を対象とした報告会を開催し、石浦智美選手（パラ水泳）、寺西一選手（5 人制サッカー）、天摩由貴選手（ゴールボール女子）、米岡聡選手（パラトライアスロン）の 4 名に登壇いただいた。第二回の 12 月 14 日では小学部 5、6 年生児童・中学部生徒を対象とした報告会を開催し、川嶋悠太選手（ゴールボール男子）、木村敬一選手（パラ水泳）、高橋利恵子選手（ゴールボール女子）、園部優月くん（5 人制サッカー）、若杉遥選手（ゴールボール女子）の 5 名に登壇いただいた。

報告会は二部構成とし、第一部は選手たちから児童生徒に向け、東京パラリンピックを終えて伝えたいメッセージを届けていただいた。第二部では児童生徒から選手に質問をして、各選手に答えていただいた。選手たちには東京パラリンピックまでの道のりについて、ご自身のこれまでの経験を踏まえていろいろな言葉で生徒たちに語っていただき、「ひたむきに努力を続けていく大切さ」や「支えてくれる人へ感謝し、応援される人間になれるような言動をすること」等を伝えていただいた。また、第一部と第二部の間にメダルを獲得したアスリートの金・銀・銅メダルを触らせてもらう場を設けた。

3. 成果と課題

報告会に参加した生徒たちからは「目標に向かって一生懸命頑張って応援される優しい人になりたいと思いました。」「『夢はきっと叶う』ということを言っている時に自分も挑戦してみようかなと、私の夢って何かと見直すことができました。」等の感想が聞かれ、今後の未来に向けて積極的にチャレンジしようとする気持ちを芽生えさせる機会となった。

東京パラリンピックには本校 OBOG・在校生から 16 名のアスリートが出場した。報告会ではすべてのアスリートからメッセージを届けていただくことはできなかったが、今後の本校の取り組みの中で協力をいただき、大会での経験等を伝えていただく場を設けたい。

4. 今後の予定

令和4年度以降の本校におけるオリンピック・パラリンピック教育では、東京パラリンピック出場の選手や関係者たちの成果を十分に活用し、本校の強みでもある「人」を柱とした取り組みを推進していきたい。

具体的には、普段の体育実技で取り扱っているパラリンピック競技の単元（例えば、ゴールボールや水泳等）の授業にアスリートを講師として招き、トップ選手から直接指導を受けることで競技に対する興味関心を高めたり、自身もパラリンピック出場に対する夢を抱くきっかけにしたりと、これまで本校が培ってきた強みである人材を活用した取り組みを行う。

5. その他

本校では2016年のリオデジャネイロパラリンピック（以下、リオパラリンピック）以降、様々なオリンピック・パラリンピック教育を展開してきた。

普段の教育実践では、体育実技の中でパラリンピック競技に取り組むことで、競技のルールや面白さを学び、スポーツを「する」ことや「みる」時に活かすことのできる実践に基づく知識や技能を獲得させることができた。また、部活動や学外のスポーツ活動等で高めた力を関東地区盲学校体育連盟主催の大会や東京都障害者スポーツ大会等で発揮し、仲間と競い合うことで達成感や充実感を得ることができた。これらの取り組みに加え、放課後に本校の体育館やグラウンドに集まって、OBOGや有志の在校生がゴールボールやブラインドサッカーの練習に取り組む姿もある。障害特性から、慣れていない環境で安心して練習することが難しいこともあり、今後も本校が競技力を向上させる拠点としても重要な役割を果たしていくこととなる。脈々と受け継がれてきた伝統も大切にしながら時代に即した進化を遂げていきたい。



写真1. 報告会の様子



写真2. 選手と記念撮影



写真3. 木村選手を囲んで

令和3年度附属聴覚特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の取組

附属聴覚特別支援学校 岡本 三郎

1. はじめに

本校でのオリンピック・パラリンピック教育は幼稚部から専攻科の各部各科において幼児児童生徒の実態に即して行われている。今年度は、12月に高等部1年を対象に「車いすバスケットボール」の特別授業を行った。また1月には、中学部1、2生を対象に「ラート」を2年ぶりに実施することができた。今回はこの2つの取組を報告する。

2. 高等部1年における「車いす」の取組

(1) 展開

高等部1年の保健や体育理論の授業の中に、車いすを教材として扱う時間を設けた。また、体育の特別授業として「車いすバスケットボール選手による講演・体験会」を行った。

(2) 目標

- ① 車いすの学習を通して多様性に気づき、共生社会に向けた態度を育てる。
- ② 車いすバスケットボールを通して、他の障がい及びパラスポーツへの理解を深める。
- ③ パラスポーツ選手の競技力を知る。

(3) 取組内容

- ① 本校体育科作成教材「車いすを知ろう」を用いて、世界や日本における車いすの歴史や車いすの構造、一般用車いすと競技用車いすの違いについて学習した。
- ② 実際に通常の車いすを使い、生徒一人一人が自走したり車いすを押すなどの介助を経験した。初めて車いすに乗る生徒も多く、一般用車いすは思った以上に安定感があり座り心地が良いことやブレーキが付属していることに驚き、安心して乗ることができることを理解していた。校舎内の移動では、スロープの傾斜に怖さを感じた生徒の中で介助する人との信頼関係が大切という意見が多く聞かれた。またエレベーター側面の車いす用ボタンは単に低い位置に設置されているだけでなく、そのボタンを押すと扉の開閉が遅くなり慌てることなく利用できることに気づき、車いす利用者の立場に立った配慮を他にも考え始める様子が見られた。
- ③ 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会（現在：JPSA 日本パラスポーツ協会）作成「かんたん！車いすバスケットボールガイド」を参考に、競技の概要や競技者とクラス分け、ルール等を学習した。
- ④ 千葉県障害者スポーツ・レクリエーションセンターから借用した車いすバスケットボール用車いす10台を使用し、体育の授業の中で車いすの乗り降りや移動等を学習した。車いすバスケットボール用車いすは一般用車いすよりも軽く操作しやすい反面、ブレーキもなく速く移動するには腕の力が必要であることを体感した。
- ⑤ 特別授業の「車いすバスケットボール選手による講演・体験会」は、今年も東京都車いすバスケットボールチーム「NO EXCUSE」所属・橘貴啓選手にお越しいただいた。講演会では橘貴啓選手ご自身の経験談や、車いすバスケットボールのルールについてクイズ形式で説明があり、生徒も熱心に聞いていた。車いすの操作は事前に経験済みであり、すぐに車いす移動の基礎練習、更には小学生用のバスケットボールを用いシュート練習を行った。生徒達は慣れてくると車いすを走らせてシュートを打つことができるようになった。シュートが入る度に大きな歓声が上がリ大きな拍手を送っていた。その後約1時間を使い、実際に5対5の生徒同士のゲーム（写真1）を行った。

(4) 成果と課題

夏に東京オリンピック・パラリンピックが開催されたこともあり車いすバスケットボールへの生徒の関心は高かった。テレビ観戦していた生徒も多く、男女が同一チームであることや障害の軽重により攻守に役割分担があることを理解している生徒も複数いた。実際に自分達でゲームをする中で、障害の有無や性別に関係なく楽しむことができるスポーツであることが理解できた。また、体力の差がある中で役割分担をして攻撃を組み立てる等の工夫も見られ、多様性を自然な形で受け入れ一つのチームの中で個々の能力を発揮することに触れた良い機会となった。橘選手の技術を目の当たりにし、自分も負けていられないという抱負を述べる生徒が多くいたことは大きな成果であった。



写真1. 試合の様子



写真2. 講師を囲んで記念撮影

なお課題としては、今までは〇〇障がいというように一つひとつの障がいに焦点を当ててきた。しかし、例えば、車いすでの移動の際に歩道と横断歩道の境の段差がなぜ2cmであるかという理由を知っていれば、車いすで超えられる高さであり白杖で確認できる高さでもあることを理解することができ、共生社会についてより深く考える機会になるのではないだろうか。今後は複数の障がいの関わりについても考えを巡らすことができるように教材準備が必要だと感じている。

3. 中学部 1、2 年における「ラート」の取組

(1) 展開

体育の特別授業として、筑波技術大学の天野和彦准教授を講師に招き、中学部 1、2 年を対象に各 2 時間「ラート」に取組んだ。

(2) 目標

- ① 初めての運動に接し、スポーツに対する興味・関心を高める。
- ② 互いに相手を尊重し練習の中でアドバイスを出し合い、技の成功を心から祝福する等の過程で良い人間関係を築く。

(3) 取組内容

- ① ラートは子供の遊び道具として考案されたものであり、筋力でラートを制御するというよりも、身体の平衡機能や位置感覚、重力などを利用してラートを回転させ、空中回転や宇宙遊泳のような非日常的な感覚を体験することができる。
- ② 令和 4 年 1 月 18 日（火）、2 年ぶりに筑波技術大学の天野和彦准教授を講師に招き「ラート」に取り組んだ。両足をラートに固定するベルト（ピンディング）は、通常のベルトではなくかかとつきの補助ベルトを使用し、生徒へ安心感を与えると共に安全に配慮した。
- ③ 中学部 1、2 年生は初めての活動であるが、全員が意欲的に参加し 2 時間の授業の中で側転、後転、前転そしてこれらの連続技まで挑戦することができた。

(4) 成果と課題

授業後のアンケート調査では、中学部 1、2 年生 25 名中 19 名がラートを大好き、3 名が好きと答えた（大好き・好き 88%）。体験する前は怖そう、難しそう思っていた生徒が 25 名中 16 名（64%）いたことを考えると、期待と不安の中で難しそうに思われた初めての技に挑戦し勇気を出して回転した喜びや達成感、できる動きが増える体験が意欲や自信に繋がったと考えられる。このように一人一人のできる動きが増える体験を通して、自然な形で達成感等を共有する雰囲気が生まれ、1 人の生徒が練習中に他の生徒がラートの側面に立ち、肘を伸ばすタイミングや、目の見る位置、顎の角度を指摘する等、アドバイスを出し合い教え合う活動に広がったことは大きな成果であった。ラートの授業に参加した生徒は過去 7 年間で約 230 名である。その中でめまい等や恐怖心から最後までできなかった生徒は 5 名程であった。これらの生徒もグループ内で自ら進んで補助や声掛けを行う等、積極的に参加することができた。他者の挑戦、技の成功に少しでも関わることでできた喜びが他者理解、共生社会への一歩になると感じた。



写真3. 初めてのラート



写真4. 連続技に挑戦

4. 今後の予定

本校におけるオリンピック・パラリンピック教育は、車いすやラートを中心に行ってきた。児童生徒にとって実際に本物を見て触って操作する体験から得られるものは多い。本校体育科教員4名も車いすやラートを毎年扱う中である程度の技術を習得し技術的な指導ができるようになった。

一般用車いすを扱う授業の中で、生徒が「これからのバリアフリー社会とは何か、どうすべきかを考え直すきっかけになった。」と言っていたように、相手の目線で物事を考える時間をつくることができた。多くの生徒が「困っている人がいたら助けてほしい。」「手助けがないと困るのは私達と同じであり、お互いに手伝えることがあれば手伝いたい。」と思う気持ちの表れからも他者理解への意識が高まったように感じた。

今後もスポーツを通して共生社会に目を向けたり、スポーツに対する興味関心やスポーツを楽しむ心を育むことができるこのような取組を継続していければと思っている。

最後に、聴覚障がい者はパラリンピック出場の枠はない。デフリンピックという大会はあるがマスコミに大きくとり上げられることも少なく、全国的に認識されていないのが現状である。先輩や知人が参加している場合を除けば、校内で話題に上がることも少なく生徒達の目標になりにくい。今後は、デフリンピックに参加し活躍する選手も含めて交流できる機会を設けていくことができればよいと考えている。

生活年齢や子どもたちの実態に応じたオリンピック・パラリンピックに関する取組

附属大塚特別支援学校 鳴原 初穂

1. 対象と目標（ねらい）

以下のねらいに向けて、幼稚部から高等部まで、学部や学級の実態に応じて、多様な実践を展開する。

- (1) オリンピックやパラリンピックそのものに親しむ
- (2) スポーツへの興味関心やフェアプレーの精神の醸成
- (3) 日本の伝統や文化に対する興味関心の醸成

2. 内容

(1) 幼稚部と小学部低学年の実践

幼稚部では、聖火リレーの映像を見て、その後オリジナルトーチの制作活動に取り組んだ。クレヨンで塗ったり、シールを貼ったりして、最後に聖火の部分を取り付けると、世界にひとつだけのトーチが完成！完成したトーチをじっくり眺めたり、トーチからトーチへ火を移すごっこ遊びをしたりする様子が見られた。

小学部低学年では、トーチを持って走る聖火リレーごっこに取り組んだ。聖火リレーごっこの中では、トーチを落とさないように持ち方を工夫したり、トーチを高く掲げながら走ったりするなどの様子が見られた。普段から、競走遊びや追いかっこなどの走る活動に取り組んでいるが、トーチを持つことによって、子どもたちが少し誇らしげな表情をしていたのが印象的だった。

他にも幼稚部や小学部低学年では、五輪の色を題材とした活動やマスコットキャラを題材とした活動などにも取り組んだ。日頃慣れ親しんだ活動の中に、オリンピックやパラリンピックに関連した要素を入れることによって、活動に見通しをもちながら、オリンピックやパラリンピックに少しずつ親しむことができた。

(2) 小学部中学年・高学年の実践

オリンピック・パラリンピックのエンブレムやマスコットキャラが伝統文様の市松がモチーフになっているということを入り口として、映像や画像を使いながら檜垣、籠目、亀甲などの伝統文様について学習した。モニターに近づいたり、見る角度を変えたりして、どのような形からできているのか興味深そうに見るような様子が見られた。

その後、正方形や長方形、三角形、六角形などの形のパターンブロックを使って、オリジナルの文様づくりに取り組んだ。同じ形を選んで何個も並べる児童やボードいっぱいブロックを敷き詰めようとする児童、対称となるように並べる児童など、児童によって取り組み方は様々だったが、できあがった文様を見せるときは、どの児童も誇らしそうな表情をしていた。

他にも、ルールを簡略化したボッチャや、キャスターボードを使ってスケートボード風のバランス運動など、オリンピックやパラリンピックの種目に関連させた活動にも取り組んだ。

中学年移行になると、オリンピックやパラリンピックを家庭で観戦している児童が多く、種目やエンブレム、マスコットキャラ等も既に知っていて、児童の方から話題にしたりすることもある。オリンピックやパラリンピックを学習活動の入り口とすることで、児童の興味関心を喚起することができた。またその興味関心をきっかけにして、体験を中心としながらも、伝統文化についての学びや競技についての学びを深めることができた。

(3) 中学部の実践

保健体育や総合的な学習の時間と関連させながら、実践を展開した。自分以外の人ががんばる姿を認め、応援することは、



写真1. トーチづくりの様子



写真2. 伝統文様づくりの様子

オリンピックやパラリンピックのフェアプレーの精神につながると考え、「応援でもスポーツを楽しむ」という部分に重点を置いた実践をした。

今年度は、陸上競技として、50m 走や立ち幅跳び、ジャベリックスロー、リレーの4種目を扱ったが、いずれの競技に取り組むときも、自分の出番だけがんばるのではなく、友達を応援するというにも意識を向けることができるように促した。一人1つの太鼓を使って応援するようにしたところ、「上手だった」「かっこよかった」ということを太鼓を叩いて伝えようとする姿が見られるようになった。また、前に出て陸上競技に取り組む生徒は、応援があると、必要以上の緊張が解けて笑顔になったり、よりよい記録を残したりすることができた。

中学部では、他にも、体の違いの学習からダイバーシティについて取り扱ったり、パラリンピック種目の体験を通して、視覚障害や肢体不自由等への理解を深めたりするなどの実践を展開してきた。オリンピックやパラリンピックの理念と関連させながら、生徒が周囲の人や社会との関わりについて学習する機会を設定することができた。

(4) 高等部の実践

「あすチャレ！スクール」（公益財団法人 日本財団パラスポーツサポートセンター主催）の事業を通じて、2000年シドニー・パラリンピック車いすバスケットボールの代表キャプテンである根本慎志さんを講師として招聘し、車いすバスケットボールの体験や講師による講和等のアスリート交流を実施した。

事前学習として、車いすや車いすバスケットボール、根本講師についての調べ学習を設定し、調べたことを掲示物にまとめる活動をした。また、調べたことから質問を考える活動も行い、講和の中で質問できる機会を設定した。

当日の交流では、最初に根本講師による自己紹介とデモンストレーションを行った。どの生徒も興味深く聞いたり見たりしていて、根本講師がシュートを決めると、生徒から自然と拍手が湧き起こった。

次に車いすの乗車体験や車いすバスケットボールの体験を行った。車いすを漕ぐこととボールを投げることを一緒に行うのは難しそうだったが、自分からボールを取りに行ったり、パスを求めたりするなど、積極的に取り組んでいた。

講和では、根本講師のプロフィールやオリンピックやパラリンピックの歴史、東京2020パラリンピックの様子などについて伺うことができた。

質問コーナーでは、「好きな食べ物は何か」という質問から、「車いすバスケットボールで大変だったことは何か」という質問までたくさんの質問に答えていただけた。生徒たちは次々と率先して手を挙げて、まだまだ質問コーナーの時間が足りないぐらいだった。



写真3. アスリート交流の様子

アスリートとの交流を通して、パラリンピックやその種目、アスリートなどに対して理解を深めるとともに、さらなる興味関心を醸成することができた。また、根本講師と一緒に車いすバスケットボールを楽しんだという経験を通して、根本講師の言葉にあった「違いがたくさんあっても、みんなで理解し合いながら楽しむことの大切さ」を生徒一人一人が感じられたのではないかと考える。

高等部では、テレビでオリンピックやパラリンピックを観戦し、その感想を個人でまとめたり、気になった競技や試合結果等についてグループで調べ学習をしたりする活動もした。オリンピックやパラリンピック、その種目やアスリートについて調べることを通して、ただ情報を得るだけでなく、興味関心を醸成し、多様性や共生などのオリンピックやパラリンピックの理念について知ったり感じたりする機会を設けることができた。

3. 成果と課題

今年度は、各部・各学級ごとに学習活動を設定したため、実態に合った活動を設定しやすく、子どもたちが自分たちの力で、自分から取り組む機会を数多く設定することができた。

また、全校集会のみで取り組むと、そのときだけのイベントとして終わってしまいがちだが、今年度は、教科の授業や総合的な学習の時間等、日常の学習の中に、オリンピックやパラリンピックに関する内容を入れることができたため、継続的にオリンピックやパラリンピックについて学ぶことができた。

一方で、新型コロナウイルス感染症の影響もあるが、オリンピックやパラリンピックに向けた活動を通して、全校生徒が交流するというような活動は十分に行うことができなかった。この課題に関しては、新型コロナウイルス感染症の動向を踏まえながら、

昨年度までの実践の成果やコンテンツを踏まえて、「音楽表現を通して日本の文化に触れる活動」や「アダプテッドスポーツやボッチャを通じた、スポーツでの交流活動」などを全校で再び実施していく必要があるだろう。

4. 今後の予定

今年度までの実践において、「オリンピックやパラリンピックそのものに関する内容」や「オリンピックやパラリンピックの種目に関する内容」、「日本の文化に触れる内容」、「オリンピックやパラリンピックを支える環境に関する内容」、「多様性・共生の理念や肢体不自由や視覚障害、聴覚障害等の障害理解に関する内容」など様々な実践を積み重ね、多様なコンテンツを蓄積することができた。次年度以降は、今年度までに作成したコンテンツを活用しながら、日頃の授業に関連させながら、オリンピックやパラリンピックに関する取組を自然な形で継続していきたい。

また、高等部が中心となって取り組んでいるアスリート交流に関しては、次年度以降も継続し、今後も直接アスリートと関わりながら学ぶ機会を設定していきたい。

5. その他

今年度までの実践を振り返ると、オリンピックやパラリンピックが東京で開催することをきっかけとして、オリンピックやパラリンピックに対して、本校の教員の理解や、「授業の中で扱おう」という教員の意識が向上してきたことがうかがわれる。そういった教員の理解や意識の向上が、オリンピックやパラリンピックに子どもたちが触れる機会を増やし、オリンピックやパラリンピックへの子どもたちの興味関心や理解を醸成することにつながったと考えられる。

昨年度まで重点を置いてきた、「オリンピックやパラリンピックを通して、全校の子どもたちが交流したり共通した体験をしたりすること」。そして、今年度重点を置いてきた、「授業と関連させながら、それぞれの生活年齢や実態に応じてオリンピックやパラリンピックを扱うこと」。その2つのことは、本校におけるオリンピック・パラリンピック教育の両輪になるものだと考える。

東京2020大会に向けた取組は今年度で最後となるが、これまでの取組によって、本校では、たくさんの指導計画や学習コンテンツを蓄積することができた。今後もそういったものを活用しつつ、全校の子どもたちの交流のツールとして、また、日頃の学習の一部としてオリンピックやパラリンピックに子どもたちが触れることができる機会を設定していきたい。

東京 2020 大会ボッチャ競技のゲーム分析を通じたパラスポーツの理解を深める実践

附属桐が丘特別支援学校 寒河江 核

1. 対象と目標（ねらい）

肢体不自由特別支援学校である当校では、パラリンピック競技大会における種目であるボッチャについて小学部から高等部までの児童生徒を対象に体育・保健体育の授業や交流学习などで取り組んできている。今年度は東京 2020 大会をテレビ中継やネット配信などから数多くのゲームを身近に感じることができるという機会を活用した、ボッチャのゲーム分析に取り組み、ポスター形式で発表し合う活動を通じて主体的・対話的で深い学びの実現に向けた高等部 3 年生を対象にした事例を紹介する。

2. 内容

前年まで個人スキルを高めつつ、ゲームを展開してきた学習をベースに、ケースを想定した課題解決学習（図 1、写真 1）、ゲーム分析、ポスター作成、プレゼンを行い種目の特性理解を深めゲームでその成果を発揮することを目指した。また、ボッチャの魅力を発信する活動を通じて卒後の豊かなスポーツライフの基盤を培うために附属久里浜特別支援学校小学部との交流活動を計画した。

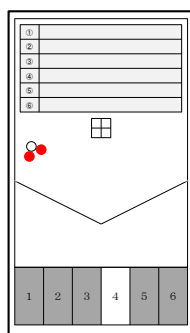


図 1. ケース課題



写真 1. ケース課題に取り組む様子

3. 成果と課題

単元始めに行ったケース課題では、状況に応じた球種の使い分けの様子が見られた。はじめから一人で考えることが難しい生徒も居る中ではあったが、個人で考えたものを持ち寄りペアで意見交換をする時間を設定することで新たな考えの形成も見られた。自分が考えたことを投球で表現することの難しさや意図していない展開となることなど種目特性の理解を深めることができた。

パラリンピックのボッチャ競技のゲーム分析では、個々にテーマを決め取り組んだ。生徒が設定したテーマのとして、『自分と同じ障害クラスのゲームの進め方』、『ジャックボールの投球位置』、『BC2 個人戦における球種分析』といったものがあつた。課題設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現といった過程を経て、自己の技能向上やゲームの進め方に関する考察があつた。（図 2）ゲーム分析後に取り組んだゲームでは、ゲーム分析で得たことを実際にチャレンジしたり、オンラインでの部活で下学年の生徒に伝えたりするなど主体的に活動する生徒の姿が見られた。（写真 2）

附属久里浜特別支援学校小学部の児童とのボッチャ交流に向けた事前準備として障害の特性理解や当日の企画に立案の準備を行った。予定していた交流は、感染症拡大に伴い、中止となった。交流実施は叶わなかったが、卒後に多様な他者と関わる中で、障害をもつ当事者として社会参画していく際の礎となることを期待している。

4. 今後の予定

今年度、附属久里浜特別支援学校と予定していたボッチャ交流は実施できなかったが、次年度以降、オンラインも積極的に活用した他校とのスポーツ交流を実施していきたいと考える。

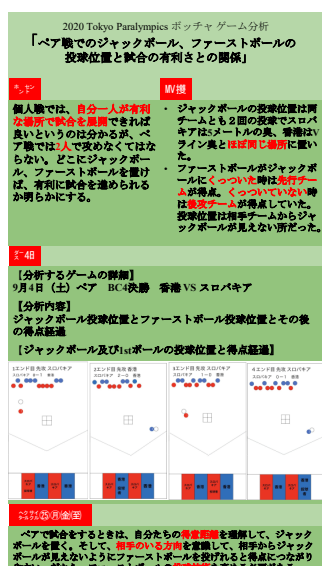


図 2. ゲーム分析ポスター



写真 2. オンライン上で行ったスポーツ部の様子

5. その他

これまで当校のオリンピック教育では、体育・保健体育の授業でオリンピズムや種目を通じた学習、アスリートを招聘した講演会等の実施に加え、他教科や食育と連携した取り組みを展開してきた。そこでは、スポーツや他国の文化を身近に感じたり、スポーツの価値やスポーツの多様性について考えたりする中で、児童生徒個々の発達段階に応じた変容が見られた。一方で社会情勢が厳しい中で実施された競技大会の観戦レポートでは、自己のスポーツへの関わりやスポーツが与える影響などについて言及する記述もあり、本来のねらいと異なる形となった部分はあるが、当事者意識をもって競技大会を見る生徒の姿があった。

ボッチャを楽しもう～ボッチャのボールを使った多彩な活動に親しむ取組～

附属久里浜特別支援学校 塚田 直也

1. 対象と目標（ねらい）

今年度、筑波大学附属久里浜特別支援学校では、小学部 1、2、3 年生と小学部 5、6 年生を対象にして、パラリンピック競技である「ボッチャ」を題材したオリンピック・パラリンピック教育を実施した。また、「ボッチャ」の魅力や楽しみ方をより子どもたちが理解できるように、外部講師として東京 2020 パラリンピック日本代表監督である村上光輝氏を招へいた。

それぞれの学年の目標は、以下のとおりである。

(1) 小学部 1、2、3 年生を対象にしたボッチャ体験授業のねらい

- ・様々な重さや硬さのボールを持ったり、ボールに触れたりする。
- ・村上先生からボールを積んだり、ボールを転がしたりするなど、ボールを使った遊び方を教えてもらい、友達や教師と一緒に体験する。

(2) 小学部 5、6 年生を対象にしたボッチャ体験授業のねらい

- ・ボッチャのボールを的に向けて転がしたり、ボール同士をぶつけたりするなど、ボッチャの楽しさを知る。
- ・ボールをぶつけて押し出したり、ボールを転がして、ボールの上のにのせたりする方法があることを知るとともに、友達や教師と一緒に挑戦する。

2. 内容

(1) 小学部 1、2、3 年生を対象にしたボッチャ体験学習について

①授業名

「ボッチャをしよう、ボッチャを楽しもう」

②授業内容及び、子どもたちの様子

- ・子供たちは、村上先生が様々な形状のボッチャボールを見せると、「あれ？何だろう」といった様子でじっとボールを見たり、自ら手を差し出してボールに触ったり、また、ボールを持って上方に投げるなど、それぞれが興味を示している様子が伺えた。
- ・子供たちは、ボールを触りながら、硬さや重さが違うことに気付き、自分の気に入った硬さや感触のボールを見付け、そのボールを握ったり、何度も投げたりしていた。また、ランプという傾斜台にボールを置き、的に向かって転がす子もいた。ランプの長さを変えることで、ボールが転がる距離が変わることに気付き、「これ（ランプを伸ばすために付ける板）、くっ付けたら、速く転がるよ。」「遠くに転がるよ。」と発言した子もいた。
- ・次に、村上先生がボールを使った新たな遊び方として、「ボールを積む」ことを紹介してくれ、皆でいくつボールを積めるかに挑戦した。始めに村上先生が、子供たちの前でボールを積んでいる様子を見せてくれた（次のページ、写真 1）。すると、子供たちは、自ら目の前に転がっているボールを持ち、順々に積み始めた。どの子も 4 個以上積むことは難しい様子だった。ある子は、より高く積むために、まずは、横一列にボールを並べ、「土台」を作った。次に、「土台」の上にボールを並べ、少しずつ高く積み上げていた（ピラミッド型）。村上先生から、「面白い積み方だね。よく考えたね。」と言葉を掛けてもらい、その子は、とってもうれしそうにほほ笑んでいた。
- ・さらに、村上先生から、ボッチャ競技の技である「プッシュ」を教えてもらった。これは、床に置かれたボール（目標）を目掛けて、ボールを転がし、目標のボールを動かす技法である。そこで、画用紙の上にボールを置き、そのボールを目掛けて自分が持つボールを投げたり、転がしたりして、画用紙の外に押し出すことに挑戦した。子供たちは、画用紙の上に置かれたボールを目掛けて、何度もボールを投げていた。なかなか画用紙の上に置かれたボールに当たらず、「難しいー。」と発言している子もいた。



写真 1. ボールを積んでみよう

(2) 小学部 5、6 年を対象にしたポッチャ体験授業について

①授業名

「ポッチャをしよう、ポッチャを楽しもう」

②授業内容及び、子どもたちの様子

- 授業の導入として、村上先生が様々な形状のボールを出すと、子供たちは、ボールに近付き、思い思いにボールに触れたり、ボールを握ったり、ボールを床に落したりして、ボールに関わることを楽しんでいる様子が見られた。
- 次に、低学年の授業同様、ボールを積むことに取り組んだ。ボールを積みやすいように、柔らかいボールを選んだり、ボールを押して表面を平らにしようとしていたりして、工夫している子がいた。また、積み上げられたボールを目掛けてボールを投げて倒すことを楽しむ子もいた。
- 低学年の授業でも見られたが、ボールが崩れないように、土台を作り、その上に重ねていく子がいた。ただ、高学年になると、横一列の土台ではなく、いくつか列を作って、より安定した土台を作り、その上にボールを積み上げ、立体的な「塔」を作った。さらに、その子は、積み上げた塔の強度を確かめるために、床に転がっていたボールを持ち、その塔にボールをぶつけていた（写真 2）。ボールがぶつかっても塔が倒れない様子を見て、満足そうな表情を浮かべていた。
- 授業の後半は、床に置いたボールを押し出す「プッシュ」に加え、「ライジング」という技法にも挑戦した。「ライジング」とは、複数のボールをくっ付けた状態で床に置き、そこを目掛けてボールを勢よくボールを転がし、そのボールを複数のボールの上ののせるという高度な技である。この技は、ボールの転がし方に加え、床に置くボールの硬さにも工夫が必要になり、とてもとても難しいものであった。子供たちは、一生懸命ボールを転がし、何とかボールを上のにせようとしていた。「できな一い。」や「難しい。」と言いながらも、あきらめずに挑戦していた。6 年生の子供が一度、成功し、「やった一。」とうれしそうにほほ笑み、近くの教師とハイタッチで喜びを分かち合っていた。



写真 2. ボールの塔を作ったよ

3. 成果と課題

本校の子どもたちの実態を踏まえると「ポッチャ」という競技のルールを正確に理解し、競技そのものを楽しむことは、難しい。そこで、今回の体験授業では、「ボールの感触や重さを感じ、楽しむこと」や「ボールを積むこと」、「ボール同士をぶつけること」など、ポッチャという競技が本来もっている面白さや魅力を感じることができるよう活動に取り組んだ。

子どもたちは、ポッチャで使用するボールの感触や重さ、転がり方など、様々なことに興味を示し、自分なりに工夫し、考えてボールに触れたり、ボールを積んだり、また、転がす様子が見られた。指導者が競技のルールという枠にとらわれず、その競技が本来有している面白さや魅力を理解し、子どもの実態に合わせて指導していくことで、子どもたちがポッチャに親しみ、興味・関心をもつきっかけになってのではないかと考える。

今後は、「的（ジャックボール）にボールを近付ける」、「多くのボールを的に近付けることができたチームが勝つ」といった競技としてのルールに沿って、子どもたち同士でゲームを楽しむことができるように指導を進めていきたい。

4. 今後の予定

本校は、幼稚園と小学部を設置している特別支援学校である。今年度は、小学部の子どもたちを対象にした授業を実施したが、今後は、幼稚園の子どもたち（3 歳児～5 歳児）を対象にした授業にも取り組んでいきたい。

また、ブラインドサッカー等、ポッチャ以外のパラスポーツにも積極的に取り組み、子どもたちが様々な競技に親しみをもてるように指導を進めていきたい。

5. その他

本校は、知的障害を伴う自閉症幼児児童が通う特別支援学校である。本校では、令和元年度から本格的にオリンピック・パラリンピック教育（以下、オリパラ教育と表記）を推進してきた。多くの学校では、オリパラ教育として選手を招へいして講

演を聞いたり、一緒に競技に取り組んだりする活動が行われている。

しかし、本校の子どもたちは、講演を聞くことや、選手と一緒に競技に取り組むことでは、オリパラについて興味・関心をもったり、その意味を理解したりすることは難しい。だからこそ、本校では、運動会で万国旗を掲示し、世界の国への関心を高めたり、勝敗のある競技に取り組み、メダルや賞状を受け取ったりする機会を設定してきた。

引き続き、様々な活動を関連させて指導することで、少しずつ子どもたちにオリパラの意味や価値を伝えていきたい。

オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業の成果の検討 － 2018 年度から 2021 年度の推進校アンケート調査を通して－

オリンピック教育プラットフォーム 宮崎 明世、真田 久、大林 太朗、福田 佳太

1. はじめに

東京 2020 大会は、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受けて、1 年の延期となった。これまでのオリンピックの歴史の中で、戦争による中止はあっても延期されたことはなく、かつてない困難の中、開催された大会となった。本稿では、2016 年度から展開された「全国オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」において実施した児童生徒によるアンケート調査より、その成果について報告する。

2013 年 9 月に東京 2020 大会の開催決定を受けて、オリンピック・パラリンピック教育（以下オリ・パラ教育とする）が推進されることとなった。スポーツ庁はその目的を、「オリンピック・パラリンピックを題材にして、① スポーツの意義や価値等に対する国民の理解・関心の向上、② 障害者を含めた多くの国民の、幼少期から高齢期までの生涯を通じたスポーツへの主体的な参画（「する」、「見る」、「支える」、「調べる」、「創る」）の定着・拡大、③ 児童生徒をはじめとした若者に対する、これからの社会に求められる資質・能力等の育成を推進すること」と定め、その具体的な内容を「オリンピック・パラリンピックそのものについての学び」と「オリンピック・パラリンピックを通じた学び」に大別して示した（スポーツ庁、2016）。

学校を中心としたオリ・パラ教育について、開催都市である東京都は独自の教育プログラムを推進したが、東京都以外の全国の自治体に向けた教育としてスポーツ庁は、2015 年度に調査研究事業を筑波大学に委託、2016 年度からは「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」を展開した。本事業では、オリンピズムの教育的価値（努力から得られる喜び、フェアプレー、他者への敬意、卓越性の追求、身体・意志・知性の調和）、パラリンピックの価値（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）を養うことを目的として、①スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び、②マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成、③スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築、④日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成、⑤スポーツに対する興味、関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成、をテーマとして展開された。本事業では 3 つの大学が中核拠点となって全国の各地域を担当し、年度初めの全国セミナーと年度末の全国ワークショップを開催するとともに、各地域における地域セミナー、年度末の地域ワークショップに参加するなどして教育活動を推進した。参加地域は年を追って増加し、開始当初の 12 地域から 2020 年には 45 地域となった。大会の延期を受けて教育事業も 1 年間延期され、さまざまな困難の中、活動は継続された。6 年間にわたって展開された事業の実態については、各年度の事業報告書（CORE, online）等に詳細が示されているとともに、先行文献において確認することができる（岡田他、2018；深見他、2021；乳井他、2021；宮崎、2019）。

近年のオリンピック・パラリンピックに向けて展開された教育プログラムの評価が、いくつかの先行研究によって明らかにされている。2012 年ロンドン大会における公式教育プログラム“Get Set”については、大会前の政府の調査（Bunt et al., 2011）において、学校で新しいスポーツ種目に取り組んだこと、小中学生にはスポーツへの参加を促進し、高校生以上の若者にはスポーツへの関心を高めたこと、若者の体育やスポーツに対する態度が改善したことなどの成果が挙げられている。一方、課題として、時間やサポートが足りないこと、プログラムの位置付けが明確でないこと、今後に関する確実性がないことで意欲が失われたことなどが挙げられた。また、2016 年リオ大会における“Transforma”では、主に教育を主導した体育教師に対する教育が行われ、その成果として、教育により影響を及ぼすソーシャル・キャピタル（信頼・規範・ネットワーク）を教師の間に形成できる可能性があること、教師の人間形成に役立ち、知識を高めることにも貢献したという報告（Ribeiro et.al, 2020）が出されている。

このように、近年の大会開催に伴う教育プログラムの評価が行われるようになったが、教育の直接の対象である児童生徒を対象にその効果を検証した研究はほとんど見られない。教育の評価は複雑で、さまざまな要因が関わることから、その検証が難しいことが原因と考えられるが、大会後に教育をレガシーとして残していくためにも、その効果の検証は必要である。そこで本研究では、筑波大学が担当する地域の推進校におけるオリ・パラ教育の教育活動に参加した児童生徒を対象とした調査から、本事業の成果を検討することを目的とした。茨城県を対象に実施した予備調査（宮崎、2017）に続いて、2018 年度から、筑波

大学が担当した15地域のすべての推進校を対象に調査を依頼した。大会の1年延期に伴って、2021年度までの調査結果から、オリ・パラ教育の成果を検討した。

なお本調査は、スポーツ庁「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」の委託事業の一環として行われた。

2. 方法

本事業では2018年度から、筑波大学が担当した全地域の推進校に対して、各地域の年度初めの地域セミナーにてアンケート調査を依頼した。協力を得られた学校に対して必要数の回答用マークシートを郵送し、教育活動の前後でアンケート調査を実施、その都度返送を依頼した。調査の回数は、2018年度から2020年度までは教育活動の前後2回とし、大会当年であった2021年度は大会の前（教育活動の前）、大会直後、年度末の3回とした。2回または3回すべてに回答した学校を統計処理の対象とし、回答数は2018年度99校（事前13,050名、事後12,898名）、2019年度157校（事前22,597名、事後22,168名）、2020年度157校（事前17,544名、事後16,781名）、2021年度158校（大会前17,895名、大会後17,644名、年度末16,834名）であった。対象校、回答数の内訳を表1に示した。

質問項目は、東京都が2017（平成29）年度に実施したアンケート項目（東京都，2017）を参考に、「オリンピック・パラリンピックについて」について、大会に対する興味、ボランティアや応援、イベントへの興味に関する5項目、本事業の「活動テーマ」については、社会のために役立つことをしたいか、お年寄りや障害のある人との交流をしたいか、運動やスポーツへの興味、日本の伝統文化に関する興味、外国の人々の暮らしや文化に対する興味の5項目とした（表2）。回答は、1：「興味がない・参加したくない」から4：「とても興味がある・ぜひ参加したい」の4件法とした。事後に回答を集計し、回答を得点化して（「興味がない・参加したくない」を1点、「とても興味がある・ぜひ参加したい」を4点）、項目ごとに2018年度から2020年度まではt検定（対応なし）、2021年度は一元配置分散分析（Kruskal-Wallis法）を行い、5%水準で有意差を検討した。

表1. アンケート対象校数と回答数の年度別内訳

項目 学校種	2018			2019			2020			2021			
	学校数	回答数		学校数	回答数		学校数	回答数		学校数	回答数		
		第1回	第2回		第1回	第2回		第1回	第2回		第1回	第2回	第3回
小学校	59	6,354	6,311	81	7,878	7,812	87	7,020	6,441	85	6,655	6,933	6,811
中学校	26	4,984	4,917	47	9,616	9,413	41	7,779	7,678	39	7,974	7,795	7,121
高等学校	8	1,541	1,508	20	4,826	4,671	18	2,431	2,369	15	2,139	2,087	2,064
特別支援学校	6	171	161	8	244	239	9	268	246	17	499	472	473
小・中学校	0	0	0	1	33	33	2	46	47	2	628	716	719
合計	99	13,050	12,898	157	22,597	22,168	157	17,544	16,781	158	17,895	17,644	16,834

表2. 質問項目

オリンピック・パラリンピックについて
ア. オリンピックに興味がありますか。
イ. パラリンピックに興味がありますか。
ウ. 将来、オリンピックにボランティアや応援などで参加したいですか。
エ. 将来、パラリンピックにボランティアや応援などで参加したいですか。
オ. これから行われるオリンピック・パラリンピックイベントに参加したいと思いますか。
活動テーマについて
ア. 社会や人のために役に立つことをしたいと思いますか。
イ. お年寄りや障害のある方と交流したいと思いますか。
ウ. 運動やスポーツをすること、みることに興味がありますか。
エ. 日本の伝統・文化について興味がありますか。
オ. 外国の人々の暮らしや習慣などを調べてみたいと思いますか。

3. 結果と考察

(1) 大会前（2018 年度から 2020 年度まで）の得点の変容と成果

教育活動の成果を示すため、2018 年度から 2020 年度までは教育活動の前後の得点を項目ごとに比較した。結果を表 3 に示した。

統計処理の結果、2018 年度、2019 年度、2020 年度すべての年度で、オリンピック・パラリンピックについての 5 項目、活動テーマに関する 5 項目のすべてにおいて、教育活動後に有意に得点が向上した。各学校で行われたさまざまな活動を通して、全体として、大会そのもの、ボランティアやイベントへの興味を高めるとともに、すべての活動テーマについて肯定的な変容が認められた。その中で最も得点が高かったのは、すべての年度において「活動テーマ」の「社会や人のために役立つことをしたいですか」と、「運動やスポーツをすること、見るのが好きですか」で、いずれも学習前に 3.2 点－3.3 点であった。前者は社会的に求められることであり、それを児童生徒も理解していることから、学習前の得点が高いと考えられる。また後者は一般的な項目で、これらの事前から得点の高かった項目についても教育活動後に得点が有意に向上し、学習成果が認められた。

また、オリンピックに対する興味（学習前 2.7－2.8 点台）とパラリンピックに対する興味（学習前 2.4－2.5 点台）を比較するとオリンピックに対する興味の方が得点が高く、ボランティアに対する興味（オリンピック 2.4－2.5 点台、パラリンピック 2.3－2.4 点台）よりも大会そのものへの興味の方が得点が高い傾向があり、その傾向は 3 年間を通して変化が見られなかった。事業の開始当初から、オリンピックに比較してパラリンピックへの興味や理解が低いことが各学校の実践の中で課題となり、事業を通して日本財団パラリンピック・サポートセンターの「I'mPOSSIBLE」をはじめとするさまざまな取り組み（パラスポーツの講習や体験、パラアスリートの講演やそれに関わる事前・事後指導など）が行われ、パラスポーツへの理解は進んだと考えられるが、調査におけるこのような傾向は事業を通して大きく変容しなかった。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、2020 年 3 月末に大会の延期が決まり、3 月から 5 月末までは学校が休校となった。2020 年度の、特に前半は影響が大きく、アスリートなどの外部講師の講演や講習、ホストタウンを活用した海外との交流などはほとんどが中止となった。その結果、回答数が前年に比較して少なく、得点の平均も「オリンピック・パラリンピックについて」の 5 項目は、前年度までと比較してやや低い得点となった。また、「活動テーマについて」の 5 項目のうち、「外国の人々の暮らしや習慣を調べてみたいと思いますか」も同様で、海外との交流が難しくなったことに影響を受けた可能性がある。その他の 4 項目はほぼ同様の得点であったことから、大会の開催や交流の有無に大きく影響を受けないテーマであることがうかがえた。このような状況の中、オンラインを活用した交流などさまざまな対策によって教育活動が継続され、すべての項目において活動の前後で有意な得点の向上が認められた。このことから、困難な状況においても教育活動によって児童生徒の興味・関心、意欲を高める成果が認められたと言える。

表 3. 学習前後における得点の比較（2018－2020 年度）

テーマ	質問項目	2018			2019			2020		
		事前	事後	t値	事前	事後	t値	事前	事後	t値
オリンピック・パラリンピックについて	ア. オリンピックに興味がありますか。	2.81	2.94	-11.5317 ***	2.83	2.97	-14.9569 ***	2.72	2.85	-12.6827 ***
		0.933	0.916		0.932	0.915		0.947	0.918	
	イ. パラリンピックに興味がありますか。	2.50	2.71	-11.7805 ***	2.55	2.73	-22.0378 ***	2.47	2.67	-20.9623 ***
		0.909	0.919		0.906	0.904		0.908	0.904	
	ウ. 将来、オリンピックにボランティアや応援などで参加したいですか。	2.57	2.72	-12.2699 ***	2.56	2.69	-14.1599 ***	2.43	2.58	-13.8618 ***
		0.990	0.969		0.977	0.958		0.971	0.947	
	エ. 将来、パラリンピックにボランティアや応援などで参加したいですか。	2.46	2.63	-14.3674 ***	2.45	2.61	-16.8359 ***	2.34	2.52	-17.728 ***
		0.962	0.960		0.950	0.945		0.945	0.935	
オ. これから行われる、オリンピック・パラリンピックイベントに参加したいと思	2.55	2.71	-13.3139 ***	2.56	2.71	-15.6845 ***	2.45	2.59	-13.0422 ***	
	0.995	0.981		0.989	0.970		0.992	0.971		
活動テーマ	ア. 社会や人のために役に立つことをしたいと思	3.23	3.28	-4.79887 ***	3.22	3.28	-8.53498 ***	3.26	3.30	-5.0706 ***
		0.767	0.789		0.766	0.771		0.761	0.757	
	イ. お年寄りや障害のある方と交流したいと思	2.75	2.85	-8.98437 ***	2.76	2.83	-8.2561 ***	2.75	2.82	-7.93059 ***
		0.873	0.882		0.864	0.869		0.870	0.863	
	ウ. 運動やスポーツをすること、みることに興味がありますか。	3.23	3.26	-1.97617 *	3.21	3.24	-3.07082 **	3.18	3.22	-3.89632 ***
		0.924	0.907		0.931	0.914		0.945	0.918	
	エ. 日本の伝統・文化について興味がありますか。	2.90	2.97	-6.8327 ***	2.85	2.93	-9.19728 ***	2.83	2.91	-8.07974 ***
		0.915	0.910		0.905	0.903		0.924	0.905	
オ. 外国の人々の暮らしや習慣などを調べてみたいと思	2.76	2.84	-6.951 ***	2.73	2.81	-8.79409 ***	2.68	2.77	-9.11803 ***	
	0.970	0.967		0.957	0.946		0.971	0.954		
回答者数（人）		13,050	12,898		22,597	22,168		17,544	16,781	

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

(2) 大会開催年（2021 年度）の得点の変容と成果

大会開催年である 2021 年度は、大会に向けた教育活動の前に第 1 回、大会後の 9 月末までに第 2 回、大会後に行われた教育活動を終えた 1 月末までに第 3 回の調査を行った。回収されたデータについて、時間を要因として一元配置分散分析を行った。ペアごとの比較を行って、どこにどのような変容があるかを検討した（表 4、図 1、図 2）。

「オリンピック・パラリンピックについて」の 5 項目は教育活動及び大会によって有意に得点が向上し、いずれの項目においても 1 回目より 2 回目、2 回目よりも 3 回目、1 回目よりも 3 回目の方が、有意に得点が高かった。つまり、大会に向けた教育活動と大会そのもの、大会後の教育活動、さらに年間の活動全体を通して、児童生徒の興味が肯定的に変化したと言える。オリンピックよりもパラリンピックへの興味の方が得点が低い傾向は 2020 年度までと変わらなかったが、ボランティアについては両者の得点は大きな差が認められなかった。また、1 年間の延期によってそれぞれの得点は 2019 年度までよりも低い傾向にはあったが、教育活動の成果は認められたと言える。

一方、「活動テーマ」については項目によって結果が分かれた。「社会や人のために役に立つことをしたいと思いますか」、「運動やスポーツをすること、見ることに興味がありますか」、「日本の伝統・文化について興味がありますか」の 3 項目については有意な変容が認められ、1 回目より 2 回目の方が得点が低くなった。そのうち、「社会や人のために役に立つことをしたいと思いますか」、「日本の伝統・文化について興味がありますか」については、2 回目より 3 回目の方が得点が高くなった。大会をはさんで得点が下がり、大会後の活動によって得点が向上したことになる。その結果「伝統・文化」については、1 回目よりも 3 回目の方が得点が高くなった。「お年寄りや障がいのある方と交流したいと思いますか」については、2 回目よりも 3 回目の方が有意に高い得点であった。さらに、「外国の人々の暮らしや習慣などについて調べてみたいと思いますか」については、1 回目よりも 2 回目、2 回目よりも 3 回目に得点があり高くなった。

1 年間の延期を経て、コロナ禍における各種スポーツの大会開催のための対策が進められたが、大会は原則として無観客で行われ、開催中も新規感染者の数は増え続けた。開催に対する疑問や反対意見も多く、学校における指導も苦労を強いられた。そういった社会全体の雰囲気や学校連携観戦をはじめとする大会観戦ができなくなったこと、国内外を問わず交流ができなくなったことなどは大きな影響を与えたと考えられる。一方、教育活動は大会終了後まで続けられ、困難な状況の中、その成果が認められたことは意義がある。

表 4. 大会前後、年度末における得点の比較（2021 年度）

テーマ	質問項目	2021			Kruskal-Wallis 検定	多重比較（ペアごとの比較）
		大会前	大会後	年度末	p 値	Steel-Dwass 法
オリンピック・パラリンピックについて	ア. オリンピックに興味がありますか。	2.65	2.76	2.80	.000	1回目<2回目 2回目<3回目
		0.961	0.940	0.938	***	1回目<3回目
	イ. パラリンピックに興味がありますか	2.44	2.55	2.59	.000	1回目<2回目 2回目<3回目
		0.922	0.921	0.920	***	1回目<3回目
	ウ. 将来、オリンピックにボランティアや応援などで参加したいですか。	2.36	2.43	2.50	.000	1回目<2回目 2回目<3回目
		0.972	0.962	0.965	***	1回目<3回目
	エ. 将来、パラリンピックにボランティアや応援などで参加したいですか。	2.30	2.37	2.44	.000	1回目<2回目 2回目<3回目
		0.947	0.944	0.950	***	1回目<3回目
オ. これから行われる、オリンピック・パラリンピックイベントに参加したいと思います	2.32	2.41	2.49	.000	1回目<2回目 2回目<3回目	
	1.000	0.981	0.977	***	1回目<3回目	
活動テーマ	ア. 社会や人のために役に立つことをしたいと思いませんか。	3.26	3.23	3.25	.001	1回目>2回目 2回目<3回目
		0.769	0.777	0.789	***	
	イ. お年寄りや障害のある方と交流したいと思いますか。	2.75	2.75	2.77	.043	2回目<3回目
		0.871	0.868	0.882	*	
	ウ. 運動やスポーツをすること、みることに興味がありますか。	3.16	3.14	3.15	.005	1回目>2回目
		0.951	0.943	0.942	**	
	エ. 日本の伝統・文化について興味がありますか。	2.83	2.80	2.85	.000	1回目>2回目 2回目<3回目
		0.928	0.926	0.927	***	1回目<3回目
オ. 外国の人々の暮らしや習慣などを調べてみたいと思いませんか。	2.70	2.69	2.73	.000	1回目<3回目 2回目<3回目	
	0.978	0.962	0.967	***		
	回答者数（人）	17,899	17,647	16,836		

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

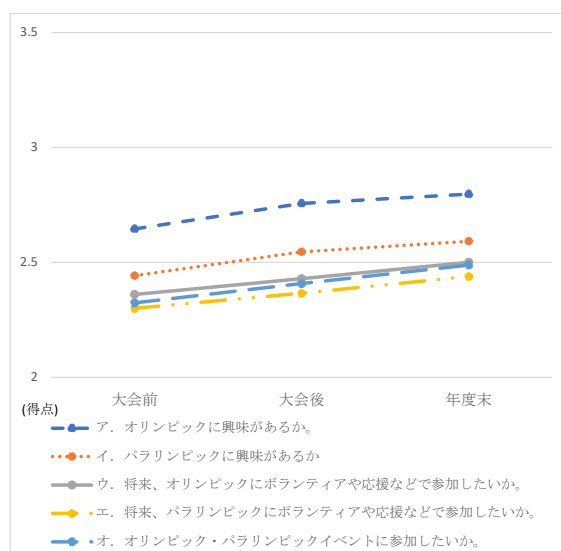


図1. 「オリ・パラについて」得点平均

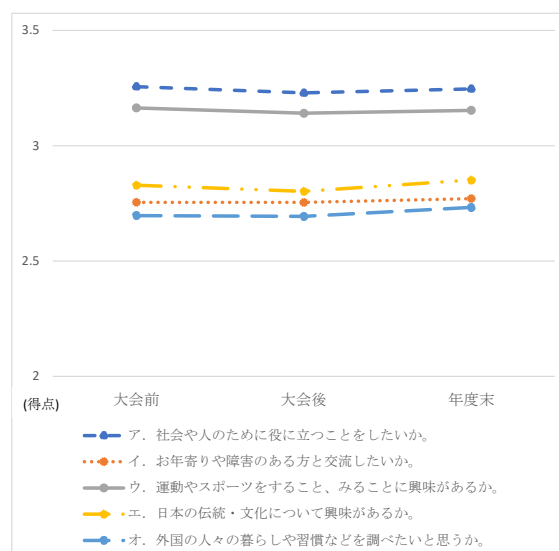


図2. 「活動テーマについて」得点平均

4. まとめ

先述した通り、東京2020大会は新型コロナウイルスの世界的パンデミックのために、1年間の延期となり、史上類を見ない困難な大会となった。海外からの渡航が難しくなったこと、原則として無観客となったことで、国の内外を問わず直接交流することが難しくなった。このことは、ホストタウンをはじめとする海外の選手や関係者との交流、国内のアスリートなどの講師との交流に大きく影響を与え、さらに特にオリンピックでは学校連携観戦ができなくなったことで直接競技を見る機会も失われた。そのような状況の中、さまざまな工夫がなされ、オリ・パラ教育は続けられたが、児童生徒への影響も大きかったと考えられる。一方で、このような困難な状況の中で両大会が開催できたことは、日本だからできたことだと海外から評価されている。本研究の結果から、大会に向けての4年間（2016 - 2019年）は順調に教育成果を上げることができ、さらに大会が延期になった2020年度もまだ大会への期待から、すべての項目でその成果が認められた。大会当年には、先述したようなさまざまな要因が影響して、大会前までと同じような成果を上げることは難しかったが、教育活動の成果は認められた。

COVID-19の影響はその後にも拡大し、2022年北京冬季大会もさまざまな制限の中での大会となった。この大会に際しても、東京2020大会での経験やオリ・パラ教育の結果、オリンピック・パラリンピックに対する知識、興味・関心はこれまでとは違ったはずである。オリンピック・パラリンピック大会は、これからもさまざまな脅威に直面することが予測される。その中で、オリ・パラ教育を通して学ぶことのできるオリンピック・パラリンピックの価値は普遍的なものであり、時代に合った方法で教育は継続されるべきである。東京2020大会を契機に進められてきたオリ・パラ教育を、大会後も継続するためには、大会までに培った経験や知識、さまざまな教育ツールを今後の教育活動に活かし、学校における教育課程への位置づけや学校や地域の特色を生かしたそれぞれの推進方略を見つけることが望まれる。

本研究の課題として、すべての対象や実際に扱ったテーマ、教育活動の内容を合わせて総合的に扱ったことで、それぞれに応じた詳細な成果を示すには至らなかったことが挙げられる。対象や活動の内容によって成果や課題は異なると考えられるため、今後の課題としたい。

<参考文献>

- Bunt, K., Llewellyn-Thomas, S., Campbell-Hall, B. and Johns, E. (2011) Schools' and colleges' engagement with the 2012 Olympic and Paralympic Games: PE and Sport. Taylor Nelson LTD. ISBN: 978-1-84775-903-0
- 乳井勇二, 秋和真澄, 富田幸祐, 関根正美 (2021) オリンピック・パラリンピック教育実践の特徴把握に向けて (その3): 講師派遣の実績を手掛かりとして. オリンピックスポーツ文化研究 No. 6, 131-146.
- 深見英一郎, 吉永武史, 岡田悠佑, 劉素雲, 木浪龍太郎, 青木彩葉 (2021) 2019年度早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センターにおけるオリンピック・パラリンピック教育の取り組み: セミナー及びワークショップを中心に. スポーツ科学研究, 18, 27-38.

宮崎明世（2017）2017（平成 29）年度スポーツ庁オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業茨城県アンケート調査報告．オリンピック教育，vol.7, 39-43.

<https://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/wp-content/uploads/2019/07/55d7053590f394ffa2ca95717f77c6ea.pdf>

宮崎明世（2019）学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の展開と評価 2016・2017 年度オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業報告書から．体育学研究，64(2); 855-868.

岡田悠佑・友添秀則・深見英一郎・吉永武史（2018）日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究：オリンピック・パラリンピック教育を実施した教員の視点に着目して．体育学研究，63：871-883.

オリンピック教育プラットフォーム（CORE）online. オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業事業報告．
<https://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/report>

スポーツ庁（2016）オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議，オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告．p.3-4.

Tiago Ribeiro, Abel Correia, Carlos Figueiredo and Rui Biscaia（2020）The Olympic Games' impact on the development of teachers: the case of Rio 2016 Official Olympic Education Programme.

<https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/00131911.2020.1837739>

東京都教育委員会（2017）：オリンピック・パラリンピック教育実践事例集【平成 29 年度】p.8-13.

https://www.o.p.edu.metro.tokyo.jp/opedu/static/page/open/pdf/teaching-materials/11_article_h29.pdf

Visually impaired photographer puts inclusion into focus - Joao Maia interview

Master's Programme student at Tsukuba International Academy for Sport Studies, University of Tsukuba

Tanmoy Mookherjee (India)

The opening day of the sitting volleyball competition in Hall A of the Makuhari Messe Exhibition. Center in Chiba saw the women's teams of Canada and Brazil play out a five-set thriller, with Brazil pipping their opponents to the post by the slimmest of margins. The Tokyo 2020 Paralympic Games, much like the Olympics that concluded a few weeks earlier, were held behind closed doors without the presence of spectators. But then again, there is a smattering of people besides the athletes, including the support staff of the respective teams, family and friends, volunteers, as well as the covering press milling around.

Joao Maia is not a difficult figure to recognise among the press photographers around the field of play, trying to capture the perfect shot that may become the visual legacy of the Tokyo 2020 Paralympic Games, after it was postponed by a year owing to the COVID-19 outbreak. Much like other photographers, even Maia has the typical beige vest with "PHOTO" emblazoned on it in bold, white letters. But instead of looking through the viewfinder or the LCD screen on his Canon DSLR, he has one ear trained on the camera, and the other, presumably, on the game that is afoot before him.

"I listen to the sounds that I can hear when the athletes are going through their routines," Maia tells this reporter while describing his process of taking pictures. "I use other perceptions too, such as the smells around me, but above everything else, I just use my heart to take these pictures. Of course, I need someone to guide me as it is difficult to take pictures on my own."

Maia is one of the few visually impaired photographers on assignment at Tokyo 2020, his second Paralympic Games after the preceding one held in his native Brazil, using a technique that is now better known as sensory photography. Maia's vision is limited to vague shapes and colours that are barely legible, which means he has to rely on his other senses to compose his images.

Making one's way around a stadium can be tricky, as specific areas are marked out for different personnel, and the same applies for press photographers. Maia is accompanied by Sandra Chammem, a social entrepreneur from Osaka, who along with being his guide in Japan, also doubles up as his interpreter from Portuguese to English. "This guidance is crucial," he says.

Originally from Piauí state in the northeast of Brazil, Maia grew up in a family of 10 brothers, three out of whom went on to develop different forms of intellectual disabilities. Maia wasn't always blind as he mentioned earlier, as a condition called uveitis, which is an inflammatory infection affecting the eyes, took away his vision by the age of 28. Until then, Maia's life revolved around his job of a letter carrier.

As a track and field athlete who participated in throwing events such as javelin, shot put and discus throw, Maia would bring his camera to training and take pictures afterwards. "I had the knowledge of these sports, hence when I started getting into photography, I was drawn towards photographing athletic events," Maia says of his journey, which began with a photography course meant for the visually impaired. "This is how I got the chance to cover the Paralympic Games in Rio (in 2016)."

It was in Rio that brought him worldwide recognition with his pictures being splashed across websites and newspapers. But travelling halfway across the world, especially during a global pandemic, was no small feat either. But with a little help from friends and multiple organisations, Maia was able to make the long trip to cover a variety of sports.

"There are four organisations I am working for here," he says, pointing to his face cover which has their names mentioned. "Fotografia Cega, a foundation that sponsored me to be able to come to Tokyo. Together with a journalist friend whom I met in Rio, we have a project named

‘4 Sentidos é uma visão’ (Four senses and a vision). From there, we started working to come to Tokyo. I’m really grateful for their support, especially from the foundation. I also want to thank another French journalist, who runs a website for photographers, because of his support for me here.”

Tokyo is the first city to host the Paralympic Games for the second time, the first one being way back in 1964, when the Olympics and Paralympics were held in conjunction together for the first time as well. After being introduced as the Stoke Mandeville Games by Dr Ludwig Guttman to rehabilitate World War II veterans by making them play sports, the event began gaining popularity and eventually morphed into the Paralympics, with the “para” part of the word referring to paraplegia.

In fact, Japan’s very own Yutaka Nakamura, an orthopaedic surgeon who visited the Stoke Mandeville Hospital in England in 1960, was so inspired by Dr. Guttman’s efforts that he took with him Japanese para athletes to participate in the event shortly after, and then brought the Stoke Mandeville Games to Tokyo later in 1964. This event, in fact, came to be recognised as the second ever Paralympic Games.

All tactile paths lead to Paralympics, at least for Joao Maia

Almost all of Japan’s walking streets around the country are lined with a strip of yellow tactile paths or Braille blocks, which began to be installed in 1967, also a Japanese invention by a man called Seiichi Miyake. Maia has taken note of this feature, especially when he makes the walk to the stadium from his hotel that is just across the street, a stone’s throw away from the Marines Stadium, home of the Chiba Lotte Marines baseball team.

“I have been taking pictures and making videos of these things (tactile paving) to be able to take it back to my country and show them what we need to do as well,” he says. “Japan is leading the world in this aspect and we need to show ourselves what we need to do too.”

Championing the case for inclusion

The Olympic and Paralympic Games are considered the pinnacle of sporting excellence, a triumph of the human spirit. While the athletes make a resounding call for inclusion and acceptance in society, the reality outside of the sporting arenas may not be as rosy.

“We have inclusion for physical disabilities, places have accessibility for people here on the streets, and more urban planning is taking place keeping in mind accessibility for persons with disabilities,” Maia says. “But accessibility has to be outside that too, on the internet for instance, in social media. For example, when you put one picture in your social media, you put a description for people who are blind like me so I can listen to the description. People are aware that we have a disability and there are movements towards inclusion, but now, people have to speak about inclusion in the digital world too.”

Maia’s impassioned plea stems from the growing level of importance of social media, especially with regards to being one of the main sources of distributing information to a worldwide audience, something that brought him recognition around the world as well. The internet, he says, “is facility for everybody.”

“When people go and search for my name, they can see I am one of the few blind photographers shooting sports in the world,” Maia explains. “It also gives me the opportunity to use my position to talk about my history, as well as the history of blind photographers with people all over the world. It feels nice to be able to know that other people with visual impairments have been taking up photography in other parts of the world as well, and I’m grateful that I can be an inspiration for others.”

While he is working on a book of his works as a photographer, Maia, much like his photography peers, perhaps chooses to focus on the bigger picture. “Taking pictures gives me a lot of joy, but when people get to see the pictures, they don’t only belong to Joao Maia, they are for everybody,” he says. “It gives me a lot of happiness when people show their appreciation towards my work.”

Now that Maia's primary objective of being able to cover the Tokyo Paralympic Games has been realised, it seems as though a weight has been lifted off his back. "I had a dream and it has come true," he says. "Before coming here, I was trying to find out everything I could about Japan, because I'm blind. Now that I'm here, everything that I heard before coming here is so true. It is such a clean country, people are so kind, and I'm so happy to be here because the world is here."

"Also, to be able to travel in these times of the coronavirus, with all the uncertainty, but the world still managed to converge here," he continues. "Of course, these Olympic and Paralympic Games will have their own place in history, but I know when people watch and read about it, I will be a part of it."



Joao Maia (photographs by Tanmoy, 2021)

委員長	溝上智恵子	附属学校教育局教育長
副委員長	梶山 正明	附属学校教育局教育長補佐
	雷坂 浩之	附属学校教育局次長
	真田 久	特命教授
	宮崎 明世	体育系准教授
	澤江 幸則	体育系准教授
	大林 太朗	体育系助教
	江上いずみ	客員教授
	眞榮田耕太	附属小学校教諭
	秋山 和輝	附属中学校教諭
	鮫島 康太	附属高等学校教諭
	登坂 太樹	附属駒場中・高等学校主幹教諭
	藤原 亮治	附属坂戸高等学校教諭
	山本 夏幹	附属視覚特別支援学校教諭
	岡本 三郎	附属聴覚特別支援学校教諭
	嶋原 初穂	附属大塚特別支援学校教諭
	寒河江 核	附属桐が丘特別支援学校教諭
	塚田 直也	附属久里浜特別支援学校教諭
オブザーバー	Benton, F.Caroline	副学長

筑波大学長

教育イニシアティブ機構

附属学校教育局教育長

教育担当副学長

Director
事務局長

事務局
(GSI棟204)

担当事務区
教育推進部教育推進課
体芸支援室

附属学校教育局

オリンピック教育推進
専門委員会

連絡・調整

11附属学校

CORE運営委員会
Advisor

関係団体

- IOC オリンピック研究・教育センター
- 各国オリンピック研究・教育センター
- 日本オリンピック委員会
- 日本オリンピック・アカデミー
- 日本パラリンピック委員会
- 日本アンチ・ドーピング機構
- 国内大学
- 国内教育機関

他

筑波大学内メンバー

つくば国際スポーツ
アカデミー (TIAS)

コラボレーター
(学外協力者)

オリンピック教育 vol.10 2021/04-2022/03

2022 年 4 月発行

発行者 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム / 附属学校オリンピック教育推進専門委員会
発行所 オリンピック教育プラットフォーム (CORE) 事務局
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学 GSI 棟 204
事務局長 真田久
編集者 福田佳太
